

大阪
平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告
XV

財団法人 大阪市博物館協会

大阪文化財研究所

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

XV

2009年度大阪市長吉東部地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会

大阪文化財研究所



NG09-2次調査 SK206出土遺物

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

XV

2009年度大阪市長吉東部地区

土地地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会

大阪文化財研究所

序 文

本書は、2009年度に実施した大阪市長吉東部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査の成果をまとめたものであり、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』の第15冊目となる。

今回の調査では弥生時代の溝、飛鳥時代の流路、室町時代の集落遺構などが検出された。これらの調査結果は、周辺で実施したこれまでの調査成果とも密接な繋がりをもつものであり、調査地域の歴史を明らかにするうえで欠くことのできない資料になった。また、長原遺跡で初出となった飛鳥時代の柱状木製品は、本遺跡のみならず、列島における古代の祭祀や精神生活を復元するうえで貴重な資料といえる。

この度の発掘調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、大阪市建設局をはじめとする関係者各位、地元住民の皆様にご協力いただいた。ここに心より感謝の意を表したい。

2012年3月

財団法人大阪市博物館協会
大阪文化財研究所
所 長 長 山 雅 一

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会(現財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所)が2009年度に実施した、大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査(NG09-1～3次、NGは長原遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市都市整備局が負担した。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会文化財研究部(現財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所)次長南秀雄の指揮のもと、文化財研究部技術管理担当課長(現総括研究員)田中清美が主として担当した。調査の期間・面積は第1章に記す。
- 一、本書の執筆および編集は、南、長原調査事務所長(現東淀川調査事務所長)佐藤隆の指揮のもと、田中が行った。本書の用字用語や体裁などの調整は、佐藤のほか、事業企画課長代理清水和明・調査課学芸員小倉徹也らの報告書校正委員が行った。
- 一、発掘調査に関して、嘱託調査員赤松佳奈(現大阪市教育委員会)、関西大学大学院博士課程森下真企(現西宮市教育委員会)・松浦暢昌(現山口大学埋蔵文化財資料館)ほか、関西大学、奈良大学、京都橘大学諸氏の協力を得た。また、報告書の作成時に大阪府立弥生文化博物館金岡勉氏・合田幸美氏、大阪府文化財センター水野正好氏・福岡澄男氏、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター年代学研究室光谷拓実氏、漢江文化財研究院呉昇桓氏から有益なご教示を得た。記して感謝したい。
- 一、遺構写真は調査担当者が撮影した。遺物写真の撮影は、西大寺フォト杉本和樹氏に委託したが一部の撮影は田中が行った。
- 一、基準点測量は、アジア航測株式会社および株式会社かんこうに委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料はすべて当研究所が保管している。

凡 例

1. 本書で用いた層序学・堆積学の用語、および断面図に示した岩相の基本パターンは、『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』[文化庁文化財部記念物課編2010]に準じる。
2. 本書における地層名は第○層と表記する。また、各遺構埋土の地層名は「第」をとって○層とのみ表記し、調査地の地層名と区別する。
3. 遺構名の表記は、井戸(SE)、溝(SD)、土塋(SK)、柱穴・小穴(SP)、その他遺構(SX)、自然流路(NR)の分類記号の後に、番号を付している。
4. 本書における遺物番号は、土器・石製品・木製品の区別をせず、1からの通し番号を付した。
5. 本書で用いた座標値は『測地成果2000』に基づく。図中の方位は図1が真北を、それ以外は座標北を基準とした。水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+○mと記した。
6. 本書で用いた地層の土色および土器の色調は[小山正忠・竹原秀雄2006]に拠った。なお、第Ⅱ章第1節以降の本文中の土色を示す記号は省略した。
7. 各遺物の記述方法、分類、年代観などについては、以下の文献を参考にした。弥生土器：[寺沢薫・森井貞雄1989]・[田中清美2011]、古墳時代の須恵器：[田辺昭三1981]、飛鳥・奈良時代の土器：[古代の土器研究会1992]、平安時代の土器：[佐藤隆1992]、鎌倉・室町時代の土器：[中世土器研究会編1995]、江戸時代の陶磁器：[九州近世陶磁学会2002]。
8. 引用・参考文献と索引は巻末に掲載した。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 長原遺跡東北地区の発掘調査	1
第1節 調査地の位置と経緯	1
1) 長原遺跡の位置	1
2) 既往のおもな調査	2
3) 発掘調査の経過	6
第Ⅱ章 調査の結果	9
第1節 NG09-1次調査	9
1) 基本層序	9
2) 遺構と遺物	12
i) 弥生時代中期の遺構と遺物	
ii) 古墳時代前期の遺構と遺物	
3) 各層出土の遺物	14
4) 小結	18
第2節 NG09-2次調査	19
1) 基本層序	19
2) 遺構と遺物	22
i) 弥生時代前期前葉の遺構と遺物	
ii) 弥生時代前期後葉の遺構と遺物	
iii) 室町～江戸時代初頭の遺構と遺物	
3) 各層出土の遺物	39
i) 第4層出土の遺物	
ii) 第7層出土の遺物	
4) 小結	42
第3節 NG09-3次調査	43
1) 基本層序	43
2) 遺構と遺物	47
i) 飛鳥時代の遺構と遺物	
ii) 室町時代の遺構	
iii) 江戸時代の遺構と遺物	
3) 各層出土の遺物	54

i) 第2層出土の遺物	
4) 小結	57
第Ⅲ章 調査結果の検討	59
1) 柱状木製品の用途	59
第Ⅳ章 調査のまとめ	63
引用・参考文献	69
索引	
英文目次	

図 版 目 次

- 1 NG09-1次調査 地層断面
 - 上：西壁断面中央部以南全景(東から)
 - 下：西壁断面細部(北東から)
- 2 NG09-1次調査 地層断面および遺物出土状況
 - 上：北壁断面細部(南から)
 - 中：北壁断面全景(南東から)
 - 下：SX701遺物出土状況(北から)
- 3 NG09-1次調査 弥生時代中期の遺構
 - 上：SD801全景(東から)
 - 下：SD801遺物出土状況(北から)
- 4 NG09-1次調査 平安時代の遺構
 - 上：第4層水田全景(南西から)
 - 下：第4層水田全景(南東から)
- 5 NG09-2次調査 地層断面
 - 上：北壁中央部以東全景(南西から)
 - 中：北壁西端部全景(南から)
 - 下：北壁中央部以西全景(南東から)
- 6 NG09-2次調査 弥生時代前期の遺構(一)
 - 上：第11層上面検出状況(北西から)
 - 中左：SP111断面(南から)
 - 中右：SP111完掘状況(南から)
 - 下左：SP112断面(南から)
 - 下右：SP112完掘状況(南から)
- 7 NG09-2次調査 弥生時代前期の遺構(二)
 - 上：SD100検出状況(北東から)
 - 中：SD100全景(北西から)
 - 下：SD100全景(東から)
- 8 NG09-2次調査 室町時代の遺構(一)
 - 上：南西部の遺構全景(北東から)
 - 中：SK308南北断面(東から)
 - 下：SK308全景(西から)
- 9 NG09-2次調査 室町時代の遺構(二)
 - 上：SD329遺物出土状況(西から)
 - 下：SD329南北断面(西から)
- 10 NG09-2次調査 室町時代の遺構(三)
 - 上：SE344検出状況(北から)
 - 中：SE344井戸側検出状況(北から)
 - 下：SE344東西断面(北から)
- 11 NG09-2次調査 室町時代の遺構(四)
 - 上：SE353水溜全景(北西から)
 - 下：SE353掘形完掘状況(北から)
- 12 NG09-2次調査 室町～江戸時代の遺構
 - 上：第2層内・第3層上面検出遺構全景(東から)
 - 下：第2層内・第3層上面検出遺構全景(南西から)
- 13 NG09-2次調査 江戸時代の遺構
 - 上：SK206陶磁器埋納状況(北から)
 - 中：SK206陶器出土状況(北から)
 - 下：SK206東西断面(北から)
- 14 NG09-3次調査 地層断面
 - 上：北壁断面(南西から)
 - 中：北壁断面(南から)
 - 下：東壁断面(北西から)
- 15 NG09-3次調査 飛鳥時代の流路
 - 上：第10層上面検出状況(南から)
 - 下：NR701柱状木製品出土状況(東から)
- 16 NG09-3次調査 江戸時代の遺構(一)
 - 上：第2層上面検出遺構全景(南から)
 - 下：SK204全景(東から)
- 17 NG09-3次調査 江戸時代の遺構(二)
 - 上：SE207検出状況(南から)
 - 中：SE207井戸側検出状況(南から)
 - 下：SE207東西断面(南から)
- 18 NG09-1次調査 出土遺物
- 19 NG09-2次調査 出土遺物(一)
- 20 NG09-2次調査 出土遺物(二)
- 21 NG09-2次調査 出土遺物(三)
- 22 NG09-2次調査 出土遺物(四)
- 23 NG09-2次調査 出土遺物(五)
- 24 NG09-2次調査 出土遺物(六)
- 25 NG09-3次調査 出土遺物(一)
- 26 NG09-3次調査 出土遺物(二)
- 27 NG09-1・2次調査 出土木製品
- 28 NG09-2・3次調査 出土木製品他
- 29 NG09-3次調査 出土木製品

挿 図 目 次

図1	長原遺跡の位置と周辺地形	1	図25	SE353出土遺物実測図(1)	33
図2	周辺の道跡と調査地	2	図26	SE353出土遺物実測図(2)	34
図3	長原遺跡東北地区における既往の調査	3	図27	SD329遺物出土状況平面・断面図	35
図4	調査区位置図	6	図28	SD329出土遺物実測図(1)	36
図5	NG09-1次調査北壁地層断面図	10・11	図29	SD329出土遺物実測図(2)	37
図6	SD801、SX802平面図	13	図30	SD329出土遺物実測図(3)	38
図7	SD801、SX802断面およびSD801出土遺物 実測図	14	図31	SX312出土遺物実測図	39
図8	SX701平面・断面図	15	図32	SK206平面・断面および出土遺物実測図	40
図9	SX701出土遺物実測図	16	図33	第4・7層出土遺物実測図	41
図10	各層出土遺物実測図	17	図34	NG09-3次調査北壁地層断面図	43
図11	NG09-2次調査西壁地層断面図	19	図35	NG09-3次調査東壁地層断面図	44
図12	NG09-2次調査北壁地層断面図	20	図36	NR701柱状木製品平面・断面図	46
図13	第11層上面検出土構平面・断面図	22	図37	NR701出土柱状木製品実測図	47
図14	第10層上面検出土構平面・断面図	23	図38	第2層上面検出土構平面およびSD301断面図	48
図15	第2層内および第3層上面検出土構平面図	24	図39	SK202・204出土遺物実測図	50
図16	SK308平面・断面図	25	図40	SE205・207、肥溜203・206出土遺物実測図(1)	51
図17	SK311平面・断面図	25	図41	SE205・207、肥溜203・206出土遺物実測図(2)	52
図18	第2層基底面検出土構・柱穴・小穴平面・断面図	27	図42	SD201出土遺物実測図	53
図19	SK308・311・327・330・333・334・341・343 出土遺物実測図	28	図43	第2層出土遺物実測図(1)	55
図20	SE338平面・断面図	29	図44	第2層出土遺物実測図(2)	56
図21	SE344平面・断面図	29	図45	縄文時代後期～古墳時代中期の木簡の諸例	59
図22	SE344井戸側実測図	30	図46	柱状木製品およびトテム・ボール様木製品 実測図	60
図23	SE344出土遺物実測図	31			
図24	SE353平面・断面図	32			

表 目 次

表1	長原遺跡東北地区におけるおもな既往の調査一覧 (1)	4	表6	NG09-3次調査の層序	45
表2	長原遺跡東北地区におけるおもな既往の調査一覧 (2)	5	表7	長原遺跡の基本層序	58
表3	本書で報告する発掘調査	7	表8	遺構観察表	65
表4	NG09-1次調査の層序	12	表9	遺物観察表(1)	66
表5	NG09-2次調査の層序	21	表10	遺物観察表(2)	67
			表11	遺物観察表(3)	68

写 真 目 次

写真1	NG09-1次調査状況(東南から)	7	写真2	NG09-1次調査状況(東南から)	7
-----	-------------------	---	-----	-------------------	---

第1章 長原遺跡東北地区の発掘調査

第1節 調査地の位置と経緯

1) 長原遺跡の位置

長原遺跡は大阪平野の南部、大阪市平野区長吉長原・長原東・長原西・出戸・川辺・六反に所在する後期旧石器時代から江戸時代にかけての複合遺跡である(図1・2)。本遺跡では、1973年に地下鉄谷町線の延長工事に伴う試掘調査で発見されて以来、大阪市営住宅、長吉・瓜破および長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う調査が継続して行われており、後期旧石器時代以降の歴史的な変遷が明らかになっている。発掘調査の進展に伴い遺跡の範囲についても新知見が蓄積され、今では東西約2 km、南北約2 kmの範囲を8つの地域に区分して、それぞれ北・東北・東・東南・中央・南・西・西南地区と呼称している(図2)。

本書で報告するNG09-1～3次調査が行われた長吉六反2丁目は、長原遺跡の東北地区に位置し

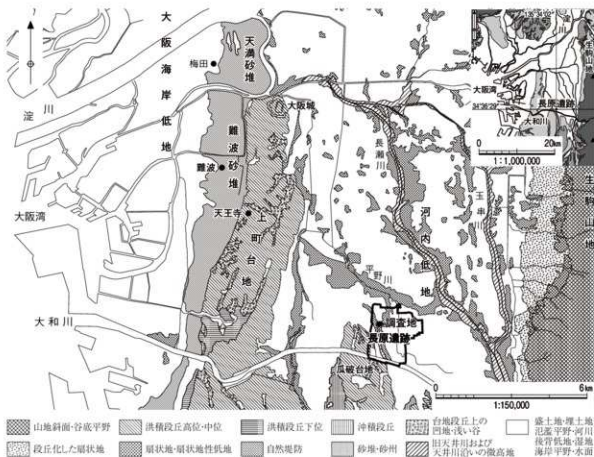


図1 長原遺跡の位置と周辺地形(土地条件図[建設省国土地理院1983]に基づき一部加筆)

ており、ここは遺跡の中でも低位段丘層が地中深くに埋没し、沖積層(難波累層)が厚く堆積している。そのため南部に対して北部の遺構は深い位置から検出されることが多い。

2) 既往のおもな調査

長原遺跡東北地区の調査は、1978年に実施された推定城山古墳跡地の試掘調査が最初であるが、その後大阪市による下水管渠工事に伴う調査が行われた後、1995年から長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う調査が始まった。この調査は大阪市建設局長吉東部土地区画整理事務所(以下、区画整理事務所と略す)、大阪市教育委員会文化財保護課(以下文化財保護課と略す)、旧財団法人大阪市文化財協会の3者により、「長吉東部地区埋蔵文化財に関する協定書」を締結して実施することになった。

1995年度に都市計画道路長吉1号線予定地で行った発掘調査(NG95-57次)では古墳時代後期に当たる流路や「しがらみ」を伴う堤防状遺構が検出されたほか、朝鮮半島の草鞋に酷似したものが出土して注目された[大阪市文化財協会1998a]。1996年度以降から本調査まで毎年のように大小の調査が継続的に行われた。この間の各年度の調査成果については表1・2に示したとおりであるが、1997年度



図2 周辺の遺跡と調査地

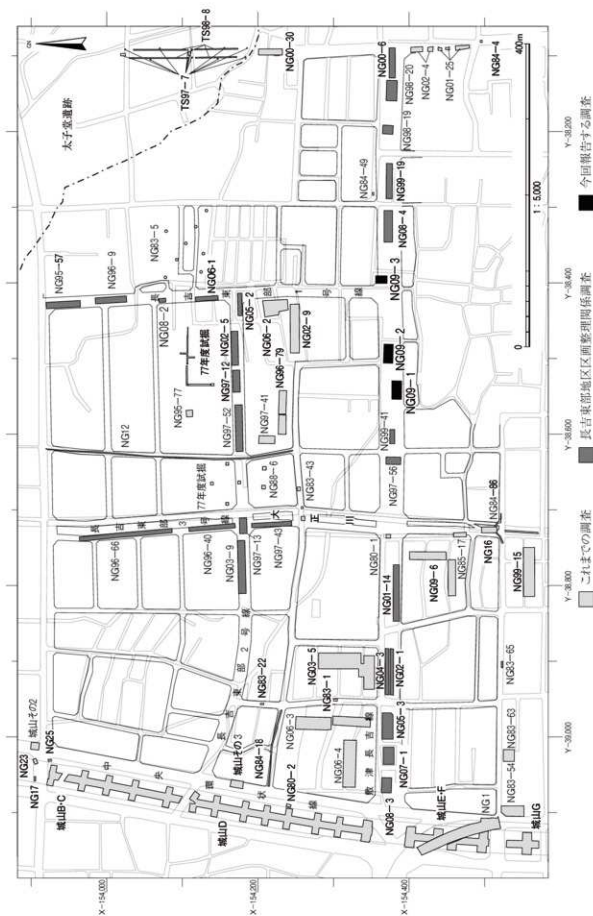


表1 長原遺跡東北地区におけるおもな既往の調査一覧(1)

調査次数等	おもな内容	文献
城山その2	弥生時代前～中期溝渠状遺構、古墳	大阪文化財センター 1980
城山その3	弥生時代中期遺物、古墳時代溝渠、奈良時代遺物	大阪文化財センター 1980
城山B-C区	弥生時代中期方形周溝墓、古墳、飛鳥時代自然流路	大阪文化財センター 1986a
城山D-E-F区	弥生時代中・後期集落、古墳時代中期水田・土壇、飛鳥～平安時代溝、室町時代水田	大阪文化財センター 1986b
城山G区	弥生時代土壇群、飛鳥～室町時代水田	大阪文化財センター 1986c
NG1	弥生時代中期溝・土壇墓、古墳時代中期溝、飛鳥時代溝	大阪市文化財協会 1978
77年度試掘	奈良時代溝	大阪市教育委員会・難波宮址調査会 1978
NG12	飛鳥時代竪列・流路・土器溜まり、平安時代土壇	大阪市文化財協会 1979a
NG16	弥生～古墳時代中期遺物、弥生時代溝、古墳時代前・中期溝・井戸	大阪市文化財協会 1979b
NG17	縄文時代晩期・弥生・古墳時代後期遺物	大阪市文化財協会 1979c
NG80-1	TP+7.2mで奈良時代溝、TP+6.9mで砂層 (NG8層)	大阪市文化財協会 1981a
NG80-2	弥生・古墳時代遺物	大阪市文化財協会 1981b
NG23	弥生時代中期遺物、古墳	大阪市文化財協会 1980a
NG25	縄文時代晩期・弥生時代中期遺物	大阪市文化財協会 1980b
NG83-1	弥生時代中期住居、古墳時代中期住居	大阪市文化財協会 1984a
NG83-5	TP+8.0mで砂層	大阪市文化財協会 1984b
NG83-22	TP+7.6mで奈良時代包含層	大阪市文化財協会 1984c
NG83-43	TP+7.8mで砂層	大阪市文化財協会 1984d
NG83-54	TP+8.1mで砂層 (NG5層か)	大阪市文化財協会 1984e
NG83-63	弥生時代中期集落、弥生時代後期土器棺墓	大阪市文化財協会 1984f
NG83-65	弥生時代中期遺物、古墳時代中期土壇状遺構	大阪市文化財協会 1984g
NG84-4	古墳時代中期溝・土壇、飛鳥時代水田	大阪市文化財協会 1985a
NG84-18	TP+8.2mで泥質土層	大阪市文化財協会 1985b
NG84-49	TP+7.7mで砂層	大阪市文化財協会 1985c
NG84-86	弥生時代後期～古墳時代中期遺物、庄内式井戸・建物、古墳時代中期土壇	大阪市文化財協会 1985d
NG85-17	縄文時代晩期遺物	大阪市文化財協会 1986
NG88-6	TP+7.8mで砂層 (飛鳥時代初期の須恵器が出土)、飛鳥時代包含層、奈良時代溝	大阪市文化財協会 1989
NG95-57	TP+8.2mで砂層 (古墳時代後期中葉の須恵器が出土)、古墳時代後期溝、平安時代集落	大阪市文化財協会 1998a
NG95-77	TP+8.0mで砂層 (古墳時代後期前葉の須恵器が出土)、古墳時代後期溝	大阪市文化財協会 1999b
NG96-9	弥生時代後期水田、TP+8.2mで砂層、飛鳥・平安時代集落	大阪市文化財協会 1999
NG96-40	TP+7.5～8.2mで砂層、飛鳥～平安時代溝	大阪市文化財協会 1999
NG96-66	弥生時代中期～庄内式遺物、TP+7.8mで砂層、古墳時代後期～奈良時代集落	大阪市文化財協会 1999
NG96-79	旧石器・縄文時代遺物、弥生時代後期～庄内式遺物、飛鳥～平安時代溝、TP+7.5mで砂層	大阪市文化財協会 1997
NG97-12	旧石器時代遺物集約中、縄文時代遺物、古墳時代中期木製品、飛鳥時代竪堀・掘立柱建物	大阪市文化財協会 2000a

に都市計画道路長吉2号線予定地で行われたNG97-12・52次調査では、後期旧石器時代の約50点のナイフ形石器や削器をはじめ、14,000点に及ぶサヌカイト製の剥片が出土し、同時代の石器製作技法を研究する上で注目すべき石器製作址が確認されたほか、弥生時代中期の水田、古墳時代の土手状遺構、飛鳥時代および平安時代の遺構群が検出されている[大阪市文化財協会2000a]。

一方、本報告の調査地のある都市計画道路敷津長吉線予定地内の調査は1998年度から着手されたが、八尾市域に近い調査地東方のNG98-19・20次調査では古墳時代中期前葉の盛土遺構とその周辺から祭祀に伴う滑石製勾玉や白玉を伴う土器類(長原I期前半)が出土している[大阪市文化財協会2001a]。次いで1999年度に都市計画道路敷津長吉線予定地内で実施したNG99-19・41次調査では、前者で縄

表2 長原遺跡東北地区におけるおもな既往の調査一覧(2)

調査次数等	おもな内容	文献
NG97-13	古墳時代自然流路、平安時代溝	大阪市文化財協会 2000a
NG97-41	縄文時代晩期～弥生時代前期流路、弥生時代中期溝、古墳時代水田、奈良～平安時代遺構	大阪市文化財協会 1998b
NG97-43	弥生時代後期溝、古墳時代自然流路、飛鳥時代溝・土壌	大阪市文化財協会 2000a
NG97-52	旧石器・縄文時代遺物、古墳時代中期木製品、古墳時代後期土手状遺構、飛鳥時代遺構	大阪市文化財協会 2000a
NG97-56	縄文時代後期踏込み跡、平安時代土手状遺構	大阪市文化財協会 2000a
NG98-19	古墳時代中期土壇状遺構・土師器・須恵器・玉類・製塩土器	大阪市文化財協会 2001a
NG98-20	古墳時代中～後期流路、古墳時代中期土壇状遺構・堅穴建物、平安～室町時代耕地	大阪市文化財協会 2001a
TS97-7	平安時代後期井戸・土塼	八尾市文化財調査研究会 2000a
TS98-8	奈良～平安時代初期の小穴、室町時代井戸	八尾市文化財調査研究会 2000b
NG99-15	縄文時代石器集中部、弥生時代中～後期・古墳時代中期集落、飛鳥時代耕地	大阪市文化財協会 2002b
NG99-19	縄文時代後期土壇、弥生～古墳時代前期水田、平安～江戸時代耕地	大阪市文化財協会 2002a
NG99-41	後期旧石器時代遺物、縄文時代早～前期建物、古墳時代前期水田、平安時代流路・土手	大阪市文化財協会 2002a
NG00-6	古墳時代中期盛土遺構、奈良時代溝、平安時代流路	大阪市文化財協会 2003a
NG00-30	奈良時代ビット、平安時代土壇・流路	大阪市文化財協会 2004a
NG01-14	古墳時代前期溝、古墳時代中期水田・溝群、飛鳥～奈良時代流路(墨画土器・獣骨出土)	大阪市文化財協会 2004b
NG01-25	鎌倉～室町時代水田	大阪市文化財協会 2004a
NG02-1	弥生時代中期集落、古墳時代品状遺構、奈良時代流路	大阪市文化財協会 2005a
NG02-4	古墳時代盛土・鎌倉～室町時代水田	大阪市文化財協会 2004a
NG02-5	縄文時代中～後期土器、弥生時代前～中期溝・水田、古墳時代前期水田、古墳時代中期木製品	大阪市文化財協会 2005a
NG02-9	旧石器時代遺物、平安時代集落	大阪市文化財協会 2008a
NG03-5	弥生時代中期方形周溝墓、古墳時代中期ウマの埋葬、古墳時代後期溝群	大阪市文化財協会 2008b
NG03-9	弥生時代後期溝、古墳時代中～後期流路、平安時代集落	大阪市文化財協会 2006a
NG04-3	弥生時代土壇・溝、古墳時代溝、飛鳥時代溝、奈良時代流路、平安時代溝、鎌倉～江戸時代水田	大阪市文化財協会 2007
NG05-2	流路、鎌倉～室町時代耕作地	大阪市文化財協会 2008c
NG05-3	奈良時代流路、弥生時代盛土・溝、古墳時代溝	大阪市文化財協会 2008c
NG06-1	平安時代の耕作地、ヒトと偶蹄目の足跡、江戸時代初期の畠	大阪市文化財協会 2009a
NG06-2	飛鳥時代の流路、鎌倉～室町時代の耕作溝	大阪市文化財協会 2008a
NG06-3	弥生時代中～後期の溝、古墳時代中期の堅穴建物・総柱建物	大阪市文化財協会 2008b
NG06-4	弥生時代後期の堅穴建物、古墳時代中期の堅穴建物・土壇・ビット	大阪市文化財協会 2008b
NG07-1	弥生時代の掘立柱建物・土壇、奈良時代の流路	大阪市文化財協会 2009c
NG08-2	古墳時代の流路・地震痕跡、飛鳥時代の溝	大阪市文化財協会 2011b
NG08-3	弥生時代後期の堅穴建物・土壇・溝、奈良時代の水田	大阪市文化財協会 2011b
NG08-4	古墳時代の水田・流路、平安時代の溝	大阪市文化財協会 2011b
NG09-6	弥生時代後期末の堅穴建物・井戸・方形周溝墓・柱穴、古墳時代前期～中期の井戸	大阪市文化財協会 2011a
NG09-1	弥生時代中期の溝、古墳時代前期の窪地	本書
NG09-2	弥生時代中期の溝、室町時代の集落と溝、江戸時代初期の陶磁器埋納構	本書
NG09-3	飛鳥時代の自然流路と柱状木製品、江戸時代後期の集落遺構	本書

文時代後期の土壇、後者から縄文時代早～前期の堅穴建物など、沖積層(難波累層)中部層に相当する縄文時代の遺構や遺物が相次いで検出された[大阪市文化財協会2002a]。

2001年度の調査は、都市計画道路敷津長吉線予定地内の西部でNG01-14次調査が行われ、古墳時代前期の溝や同中期の水田が検出されている。また、奈良時代の流路から、大量のウシ・ウマの骨をはじめ、人面墨画土器やミニチュア土器などの祭祀遺物が出土した[大阪市文化財協会2004b]。

2002年度以降も表2に示すように都市計画道路敷津長吉線予定地内および都市計画道路長吉東部2

号線予定地内の調査を行った。このうち、NG04～3次調査で、「東十五」と記載された木簡の削り屑が出土したほか[大阪市文化財協会2007]、NG06～1次調査では弥生～古墳時代の流路や湿地帯および、平安時代以前の地震痕跡が確認されている[大阪市文化財協会2009a]。

一方、都市計画道路敷津長吉線予定地内の西端に近い位置にあるNG07～1次調査では弥生時代中期後葉の掘立柱建物や土壌をはじめ、古墳時代中期の土壌、奈良時代の流路が検出されたほか、平安時代末～鎌倉時代の初めに発生した可能性がある地震による水平断層が確認され、その変形構造や成因についての検討が加えられた[大阪市文化財協会2009c]。

3) 発掘調査の経過

今回報告するNG09～1～3次調査地は、都市計画道路敷津長吉線予定地内に位置しており、これまでにを行った周辺部の調査結果から、調査地は沖積層が現地表面下約6mまで堆積していることが予想された。そのため、調査地内に事前にシートパイルによる土留め工事を行うほか、工事車両の通行と作業空間および掘削残土の仮置場を確保する必要があった。以下にNG09～1～3次調査の調査経過について記述する。なお、各調査の調査期間や担当者については表3に示す。

NG09～1次調査は平成21年9月7日から準備工および土留め工事に着手し、9月28日から第2層までの各層を重機掘削した。本層より以下は人力で掘削して、平面的な調査を行った。なお、現地表面下5～6m間については地層の堆積状況を確認するため、トレンチ調査を実施した。同年12月21日には掘削、記録作業が完了し、平成22年1月29日には埋戻しおよびシートパイルの引抜きや整地など、現場におけるすべての作業を完了した。

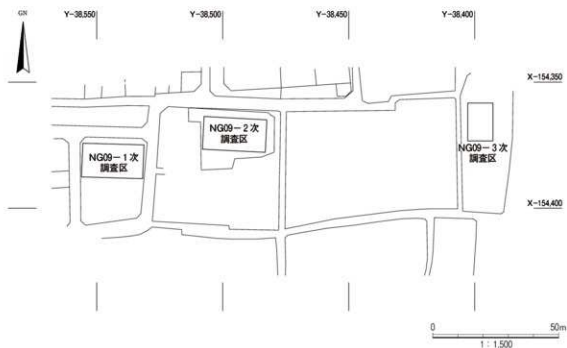


図4 調査区位置図

NG09-2次調査は、平成21年8月20日から準備工および土留め工事を行い、10月14日から第2層の上面まで重機で掘削した。第3層以下、現地表下5mまでの平面的な調査を行ったが、遺構が散漫となった第8層以下の調査は調査区の西側半分に限った。第11層以下は当地の低位段丘構成層の確認をするためのトレンチ調査を行った。同年12月28日には図面作成および写真撮影などの記録作業を完了し、平成22年2月26日には補助調査も終えて、埋戻しおよびシートパイルの引抜きや整地など、現場におけるすべての作業を完了した。

NG09-3次調査は、平成22年2月2日から現代整地層以下第3層までを重機で掘削し、これより下位は人力により遺構・遺物の検出を行いながら、図面作成、記録および写真撮影などを行った。また、現地表下5m以下については地層確認のためのトレンチを設定して5.5mまで掘削した。同年3月17日には掘削・記録作業が完了し、3月31日には埋戻しおよびシートパイルの引抜きや整地など、現場におけるすべての作業を完了した。

平成22年4月から調査回数毎に報告書の作成作業にかかり、出土遺物については、遺物台帳に登録後、遺構や地層ごとに整理して、遺物の洗浄・注記・抽出および接合のあと実測図を作成した。それぞれの実測図はデジタルトレースし、遺構や地層毎に挿図とした。また、調査回数毎に層序や遺構の平面および断面実測図を整理して、遺構については平面図と断面図の調整を行った。その後、報告書に掲載する遺構および地層断面図をデジタルトレースして挿図にした。



写真1 NG09-1次調査状況(東南から)



写真2 NG09-1次調査状況(東南から)

表3 本書で報告する発掘調査

計画道路名	調査回数	調査地番	面積	調査期間	担当者
数津長吉線	NG09-1	長吉六反2丁目	300㎡	平成21年9月7日～平成22年1月29日	田中・松浦
数津長吉線	NG09-2	長吉六反2丁目	300㎡	平成21年8月20日～平成22年2月26日	田中・赤松・森下
数津長吉線	NG09-3	長吉六反2丁目	150㎡	平成22年2月2日～平成22年3月31日	田中・松浦

発掘調査時に撮影した遺構や地層の写真は回数毎にファイルに整理して収納したものの中から報告書の図版や挿図の版下として抜粋したほか、遺物については新たに写真図版用に撮影したものを編集し、報告書に掲載した。以上の諸作業を行って報告書を刊行した。

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 NG09-1次調査

1) 基本層序

本調査地では層厚80～90cmの現代の盛土層(RK0層、NG0層)以下約6mの間に第1～13層に及ぶ地層を確認した(図5・表4)。以下各層の岩相および特徴について記述する。

第1層：黒色およびオリーブ黒色を呈する細礫混り極細粒砂質シルトからなる現代の作土層である。層厚は10～15cmある。RK1層、NG1層に相当する。

第2層：本層は第2a・2b層に細分される。第2a層は灰オリーブ色極細粒砂質シルト層で、層厚は30～40cmあり、下方に向って砂質が強くなる。江戸時代の作土層である。第2b層はにぶい黄褐～灰色シルト質極細粒砂からなる水成層で、層厚は20～30cmある。RK2層、NG2層に相当する。

第3層：灰色粘土質シルトからなる層厚が20cm程度の作土層で、本層の下位は植物の根や酸化第2鉄斑文を多く含む。本層の上部から江戸時代の磁器の細片が出土したことから、RK2層、NG2層に對比される。

第4層：本層はオリーブ黒色および暗オリーブ灰色シルト質粘土(第4a層)、灰色粘土質シルト(第4b層)、灰オリーブ色シルト質粘土(第4c層)、に細分される暗色帯である。これらの地層には植物の根や酸化第2鉄の斑文が見られるほか、平安時代の黒色土器片が出土した。第4d層は灰色細礫混りシルト質粘土からなる水成層で、層厚はおおよそ30cmある。本層から平安時代の黒色土器の底部が出土したことから、下限は平安時代中期頃と推定される。RK4C層、NG4C層に相当する。第4e層は暗オリーブ灰～灰色細粒砂混り粘土質シルトからなる地層で、層厚は20～30cmある。本層の上面はあばた状に薄く暗色化しており、下面で鋤溝や踏込みが確認されたことから作土層とした。奈良時代の可能性のある須恵器の細片が出土している。第4f層は層厚が10～20cmの暗緑灰色細粒砂混り粘土質シルトからなる作土層である。以上の各層については近くにあるNG99-41次調査地との地層の標高や岩相を比較検討して、RK5～6層、NG5～7A層に對比した[大阪市文化財協会2002a]。

第5層：本層はオリーブ黒～暗オリーブ灰色を呈するシルト質粘土および粘土質シルトが互層になった水成層で、層厚は約40cmある。上位では植物遺体を含むシルトのラミナが観察されたほか、上面には動物の足跡があることから湿地環境下で堆積したようである。本層の下位は植物遺体のラミナが薄くなり、極細粒砂質シルトから極細粒砂へと岩相が変わっていた。RK7B i 層、NG7B0層に相当する。

第6層：暗緑灰色細粒～極細粒砂と植物遺体をわずかに含むシルトの互層からなる水成層である。本層の層厚は約30cmある。第5・6層の境界付近には、層厚約1cmの黒色極細粒砂が連続する地震に

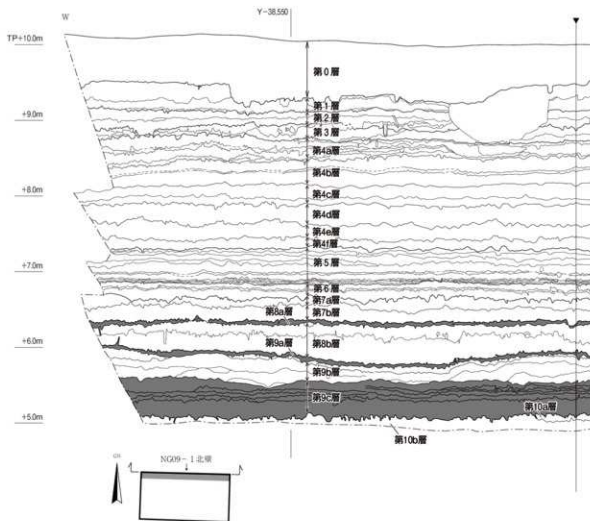


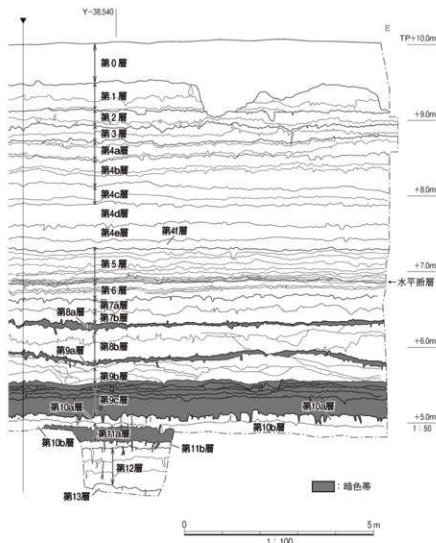
図5 NG09-1次調査北壁地層断面図

よる水平断層が確認された。RK7B ii 層、NG7B i 層に相当する。

第7層：本層は暗オリーブ灰～灰色粘土質シルトからなる、層厚が15～20cmの第7a層と、灰～緑黒色粘土質シルトからなる、層厚10～20cmの第7b層に細分される。第7a層はやや暗色化しており、一見茶褐色のあばた状を呈し、槽や板、杭などの木製品が出土した。本層は岩相や標高などからみて、調査区の西側に位置するNG99-41次調査地の古墳時代前期の作土層とされた第12a iii 層に対比される[大阪市文化財協会2002a]。第7b層は草本科植物の遺体を多く含むことから調査地が湿地性の環境下にあったことを示唆している。RK8A層、NG7B iii 層に相当する。

第8層：本層はオリーブ黒～灰色極細粒および中粒砂混り粘土質シルトからなる、層厚5～10cmの第8a層と、灰色粘土質シルトからなる、層厚約20cmの第8b層に細分される。第8a層は暗色化しており、上面でSD801を検出した。第8a層はRK9B層、NG8B層に、第8b層はRK9C層、NG8C層に相当する。

第9層：本層はやや暗色化した暗オリーブ灰色シルト質極細粒～細粒砂からなる、層厚5～10cmの第9a層、暗緑灰～オリーブ灰色粗粒～極細粒砂からなる、層厚40～50cmの水成層の第9b層、植物



遺体を多く含むラミナが観察された層厚10cm前後の水成層および層厚20～30cmの暗色帯からなる第9c層に細分される。以上のうち、第9a層は西南部で層厚を増すが、東北部は層厚が薄いことから離水ほかの環境が変化した時期は短期間であったようである。RK10A層、NG9A層に対比される。第9b層はRK10B層・NG9B層に相当する。第9c層の上部は植物遺体のラミナが観察された水成層であるが、下部は黒色粘土からなる暗色帯である。本層は縄文時代後期の土器片が出土したことから、RK10C層、NG9C層に対比される。

第10層：本層はオリーブ黒色シルト質粘土層を基調とするが、色調がオリーブ色の強い層厚約20cmの水成層である第10a層、黒味がかった層厚約20cmの水成層とみられる第10b層に細分される。第10a層はRK11層、NG10層に、第10b層はRK11層、NG10層に対比される。

第11層：本層は黒色シルト質粘土～細粒砂混り粘土質シルトからなる層厚約10cmの第11a層と、黒褐色極細粒～細粒砂質シルトからなる層厚約15cmの第11b層に細分される。第11a層は暗色化しており、上面に乾痕や植物の生痕が見られる。遺物の出土はないが、上下の層準からみて、RK12A層およびNG12A・B層に対比される。第11b層も上面に乾痕が見られるほか、土壌サンプルから鬼界アカホヤ火山灰起源の可能性の高い褐色火山ガラスと阪手火山灰起源とみられる角閃石が確認されたことから、RK12C～13A層、NG12C～13A層に相当する。

第12層：灰オリーブ～オリーブ灰色シルト質極細粒および中粒砂からなる地層で、下位になるほど砂粒を多く含む。上面に植物の根痕が多くある。RK13A i 層、NG13A i 層に相当する。

表4 NG09-1次調査の層序

層序	説明	層厚 (cm)	自然現象ほか	おもな遺構	おもな遺物	時代	長野標準層序との対比
第0層	現代盛土	80~90	盛土			現代	RK0層 NG0層
第1層	黒～オリーブ灰色極細砂り極細粒砂質シルト	10~15	作土層			古・現代	RK1層 NG1層
第2層	灰～オリーブ灰色極細粒砂質シルト	30~40	作土層	土鈴		江戸時代	
第3層	土～灰黄色～灰色シルト質極細粒砂	30~30	水成層				RK2層 NG2層
第4層	灰色粘土質シルト	30	作土層	竈跡			
第5層	オリーブ～灰～黒オリーブ灰色シルト質粘土	30					
第6層	灰色粘土質シルト	5~10	暗色帯			平安時代	
第7層	灰～オリーブ灰色シルト質粘土	30		黒色土器 土師器		平安時代中期	RK4C層 NG4C層
第8層	灰色極細砂りシルト質粘土	30	水成層				
第9層	黒～オリーブ～灰色極細粒砂り粘土質シルト	20~30	作土層	↓落込み	陶器	奈良～古墳時代 古墳時代	RK5～6層 NG5～7A層
第10層	暗緑灰色極細粒砂り粘土質シルト	10~20	作土層	↓落込み			RK6～7層 NG8～9A層
第11層	オリーブ～黒～オリーブ灰色シルト質粘土・粘土質シルト	40	植物遺体を 多く含む 地層による水平層			古墳時代中期	RK7B層 NG7B層
第12層	暗緑灰色細粒～極細粒砂・シルト	30	水成層			古墳時代前期	RK7B層 NG7B層
第13層	黒～オリーブ～灰色粘土質シルト	15~20	植物遺体・ 草木残骸の 植物遺体	→SX701	木製品・土器片	古墳時代前期	RK7B層 NG7B層
第14層	灰～緑～黒粘土質シルト	10~20		→SD801-SX802		弥生(畿内第5) 石器	RK8A層 NG8A層
第15層	オリーブ～黒～灰色極細粒～中粒砂り粘土質シルト	5~10	古土層			弥生中期	RK9B層 NG9B層
第16層	灰色粘土質シルト	30					RK9C層 NG8C層
第17層	黒～オリーブ～灰色シルト質極細粒～細粒砂	5~10	土部暗色化				RK10A層 NG9A層
第18層	暗緑～オリーブ～灰色極細粒～極細粒砂	40~50	水成層				RK10B層 NG9B層
第19層	オリーブ～黒～灰色粘土質シルト層 黒色粘土	20~30	暗色帯	縄文土器(後期) 円形土器	縄文時代晩期	RK10C層 NG9C層	
第20層	オリーブ～黒～灰色シルト質粘土	30	水成層	縄文土器			
第21層	オリーブ～黒～灰色シルト質粘土	30	水成層				RK11層 NG10層
第22層	黒色シルト質粘土～細粒砂り粘土質シルト	10	暗色化			縄文時代中期	RK12層 NG12A・B層
第23層	黒色極細粒～細粒砂質シルト	15	乾煎	石器		縄文時代早期	RK12C～13A層 NG12C～13A層
第24層	灰～オリーブ～オリーブ～灰色シルト質極細粒～中粒砂	15	土部から植物根の痕跡				RK13A層 NG13A層
第25層	明緑～緑～灰色極細粒砂質シルト～シルト質粘土	20以上					RK13A層 NG13A層

←: 上面検出遺構 ↓: 下面検出遺構 □: 地層内検出遺構

第13層: 明緑～緑灰色極細粒砂質シルトおよびシルト質粘土層で、下部に向って粘土質が強くなる。RK13A ii層、NG13A ii層に相当する。

2) 遺構と遺物

i) 弥生時代中期の遺構と遺物

第8a層の上面では弥生時代中期のSD801および落込みSX802を検出した(図6・図版3)。

SD801 調査区の南東から北西方向に流れる幅0.1～0.3m、深さ0.1m前後の断面U字形の溝である。

溝内には機能時堆積層であるオリーブ黒色極細粒砂り粘土質シルトが堆積しており、東南部で弥生土器の細片および石器遺物が出土した。本溝は規模や方向からみて、排水に関わる溝と考えられる。

1は堿の口縁部の細片である(図7)。端部をわずかに肥厚させており、端面は凹線状を呈する。弥生時代中期後葉に属するものである。

2は最大長3.00cm、最大幅1.70cm、最大厚0.40cmのサヌカイトの剥片で、外縁部の一端に表裏面が



图6 SD801、SX802平面图

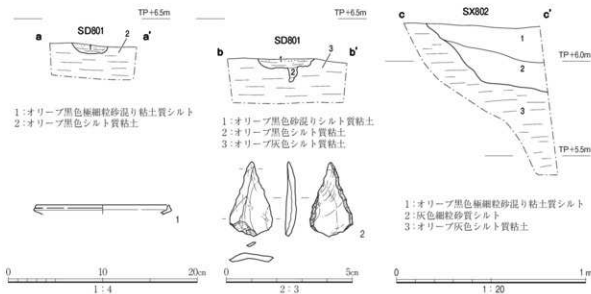


図7 SD801、SX802断面およびSD801出土遺物実測図

ら細部調整を加えている(図7)。基部にも細部調整を加えており、全体の形態からみて、石鐮の未成品の可能性がある。

SX802 調査区の東南部、SD801の南側に位置する落込みであるが、遺構の大半は調査範囲外であり、平面形態や詳細な規模については明らかでない。落込みの深さは検出面から約0.7mある。埋土は下から灰色細粒砂質シルト、オリーブ黒色極細粒砂混り粘土質シルトで、水つきである。遺物は弥生土器の細片が出土した以外に若干の炭化物が出土したのみである。遺構検出面下の第9層以下の各層を掘進むことから流路以外の遺構として認定しうる。

ii) 古墳時代前期の遺構と遺物

SX701 第7a層の上面で検出した深さ0.1m前後の浅い窪地である(図8、図版2)。窪地の検出面の標高はTP+6.6m前後あり、調査地区の南東から北西方向にわずかに傾斜していた。SX701内では木製品や枝、植物遺体などが出土した。第7a・b層は先述したように調査区の西側に位置するNG99-41次調査地の古墳時代前期の作土層とされた第12aiii層に対比されることから、SX701も水田の一面に当る窪地の可能性がある。ここでは出土した木製品について記述する(図9)。

3は最大幅25.9cm、残存44.6cm、最大厚8.70cmの板状の木製品である。小口の側に幅3.5~5.0cm、奥行き約13cmの切込みがある。用途については明らかでない。板目材を用いている。4は丸味のある身部から把手を削り出した槽である。器体の約半分を欠損しているが、把手を含めた長さは約37cmに復原しうる。一木から削り貫いて作っている。5~7は厚さ2~3cmの板材を縦割した杭である。いずれも表面が腐蝕しており残りが悪い。これらの所属時期は層準からみて古墳時代前期に属するものであろう。

3) 各層出土の遺物

本調査では第2a・4b・4d・7a・9c・11b層から遺物が出土したが、その量は少なく細片が多かった(図10)。15は第2a層から出土した土鈴である。上端に径0.3cmの紐孔を穿つ。江戸時代後葉に属するもの

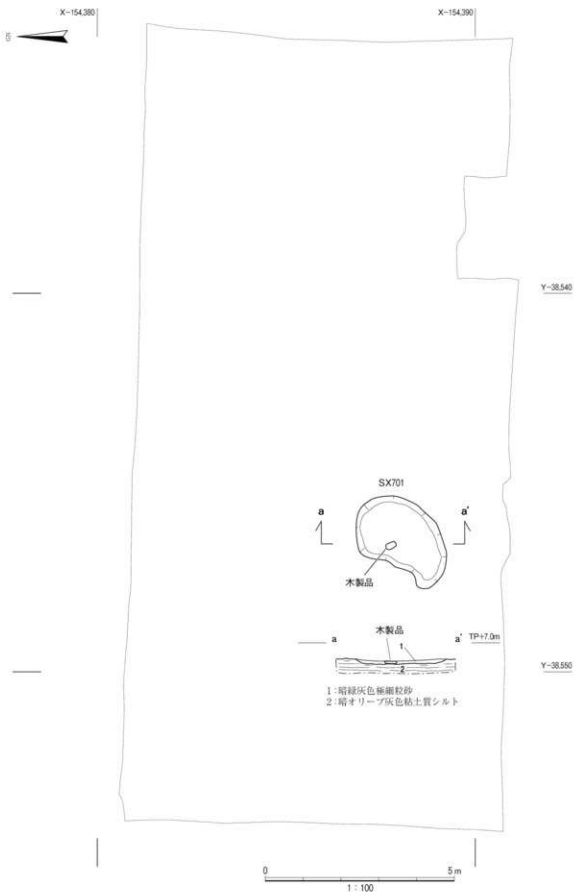


図8 SX701平面・断面図

である。8は第4b層から出土した口縁部が「て」の字を呈する土師器小皿である。11世紀代に属するものとみられる。9は第4b層から出土した黒色土器碗A類の底部である。器体の内底面をヘラミガキで調整している。10世紀中葉に属するものであろう。10は第4d層から出土した、口縁端部を丸くおさめる土師器杯Aである。奈良時代中葉に属するものであろう。12も第4d層から出土した丸味のある体部

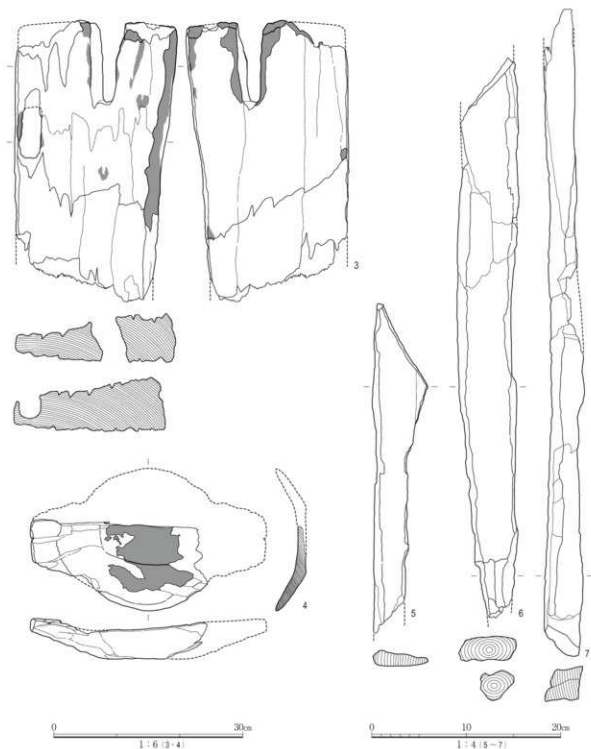


図9 SX701出土遺物実測図

から口縁部が短く開く土師器鉢である。奈良時代に属するものと思われる。11・16・17は第7a層から出土した弥生土器甕であるが、器表面が風化しており調整は判断しがたい。11の口縁端部は上方に肥厚しており、体部の外面は右上がりの細かいタタキで整形し、内面は左上がりのナデで調整している。16・17も体部の外面の整形は右上がりのタタキで、内面の調整は風化しており明らかなでない。

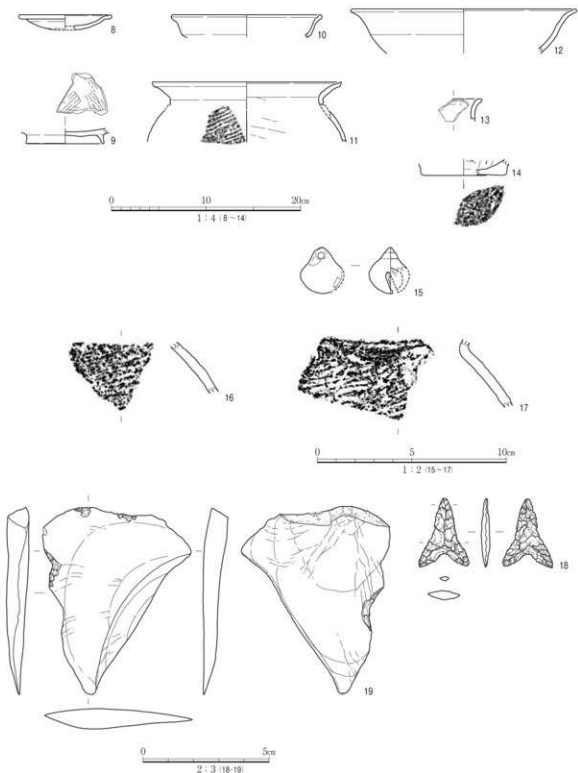


図10 各層出土遺物実測図

上の甕は庄内2期[田中清美2011]に属するものであろう。13・14は第9c層から出土した縄文土器の細片である。13はわずかに外反する口縁部片で、14は径9cmの深鉢の底部である。縄文時代の後期に属するものと思われる。18は第9c層から出土した最大長2.70cm、最大幅2.00cm、最大厚0.35cmを測るサスカイト製の凹基式石鏃である。表裏面とも外縁部から細部調整しており、尖端および基部端とも尖っている。縄文時代後期以前の石鏃である。19は第11b層から出土した最大長7.5cm、最大幅5.90cm、最大厚0.90cmを測るサスカイト製の剥片である。主剥離面側に原面が残る縦長の剥片で、外縁部に小さな調整剥離がある。後期旧石器～縄文時代の草創期に属する可能性がある。

4) 小結

NG09-1次調査区では後期旧石器時代から江戸時代に至る遺物および、溝や落込み、水田などを検出したが、遺構・遺物ともにその数は少なかった。ただし、縄文時代後期の土器片や石鏃などは、当地が調査地の西側にあるNG99-41次調査地で検出された石器や土器集中部を伴う竪穴建物や炉跡などから構成された縄文時代前期の集落に続く人々の生活の場であったことを示唆している。また、弥生時代中期のSD801やSX802は、当地域の西方にある出戸自然堤防上に展開した弥生時代中期後葉の集落と同時期であることから、双方の関係を究明するうえで基礎的な資料となった。

第2節 NG09-2次調査

1) 基本層序

本調査では層厚30～60cmの現代の盛土層(第0層)以下5mまでの地層について、第1～13層まで区分した(図11・表5)。なお、5m以下の地層については調査地内の中央部にトレンチを設定して、地表下6mまでの補足調査を行った。以下に各層の特徴について記述する。

第1層：オリブ黒色中粒砂質シルトからなる層厚20cm前後の現代の作土層である。RK1層、NG1層に相当する。

第2層：黄灰～暗灰黄色極細粒～細粒砂混り粘土質シルトからなる盛土層で、黄褐色極細粒砂質シルトの偽礫を多く含む。本層の層厚は約60cmあり、瀬戸の陶器や肥前磁器および、瓦質土器・瓦器などが出土した。本層は室町時代の遺物を含む盛土層であり、盛土層内からSK206・247～252が検出されたほか、SK308・SE344・SD329などの300番代の遺構は盛土以前の第3層の上面で検出された

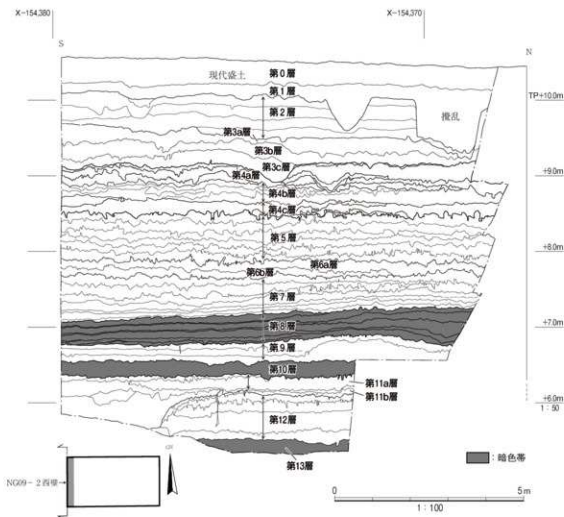


図11 NG09-2次調査西壁地層断面図

表5 NG09-2 次調査の層序

層序	岩相	層厚(cm)	自然現象ほか	おもな遺構	おもな遺物	時代	長原標準層序との対比
第0層	現代盛土および埋瓦	60~80	盛土				RK 0層 NG 0層
第1層	オリーブ黒色中粒砂質シルト	20	作土層	SC206, SC209 SC206-247-252	灰・現代 ・瓦器・瓦質土器	近・現代	RK 1層 NG 1層
第2層	黄灰～黄灰黄色極細粒～細粒砂混り粘土質シルト	60	盛土層			室町時代	RK 3層 NG 3層
第3a層	にぶい黄褐～黄灰色極細粒砂～シルト質極細粒砂	30~40					
第3b層	灰色極細粒砂質シルト	5~20	水成層				RK 4層 NG 4層
第3c層	灰色極細粒～中粒砂	10~20					
第4a層	オリーブ黒色粘土質シルト	5~20	作土層				RK 4b層 NG 4b層
第4b層	暗オリーブ灰色極細粒砂質シルト	15~40	水成層		土師器 黒色土器		RK 4b層 NG 4b層
第4c層	暗オリーブ灰色粘土質シルト	20~30	作土層				RK 4b層 NG 4b層
第5層	暗オリーブ灰色粘土質シルト	10~20	水成層 (植物遺体を多く含む)				RK 4c層 NG 4c層
第6a層	オリーブ黒色粘土質シルト	10~20	水成層				RK 7b層 NG 7b層
第6b層	暗オリーブ灰色粘土質シルト	20	作土層				RK 8a層 NG 7b層
第7層	オリーブ黒色シルト～粘土質シルト 灰色極細粒～細粒砂	40~50	水成層				RK 9b層 NG 8b層
第8層	オリーブ褐色極細粒砂混り粘土質シルト	20	暗色帯	SC860 →溝・小穴・土塊 →SD106・SD107 →SD113・SP111 →112, SK114			RK 9c層 NG 8c層 RK 10a層 NG 9a層
第9層	オリーブ黒～灰色シルト～シルト質粘土	20~60	水成層				RK 9c層 NG 8c層
第10層	オリーブ黒色シルト～粘土質シルト	5~15	暗色帯			弥生前期	RK 10b層 NG 9b層
第11a層	暗オリーブ灰色極細粒砂質シルト	30~40	水成層				RK 10b層 NG 9b層
第11b層	灰色細粒～中粒砂	20					RK 10b層 NG 9b層
第12層	暗オリーブ灰色粘土質シルト～シルト質細粒	40~50	水成層				RK 10c層 NG 9c層
第13層	黒～オリーブ黒色粘土質シルト	20以上	暗色帯				RK 10c層 NG 9c層

←: 上面検出遺構 ▼: 下面検出遺構 ↓: 断面検出遺構 □: 地盤内検出遺構

遺構である。RK 3層、NG 3層に相当する。

第3層: 本層は層厚60cm前後の水成層であるが、第3a層のにぶい黄褐～黄灰色極細粒砂～シルト質極細粒砂層、第3b層の灰色極細粒砂質シルト層、第3c層の灰色極細粒～中粒砂に細分された。本層は東に向うにつれて層厚を増し、粒径も大きくなる。RK 4層、NG 4層に相当する。

第4層: 本層も第4a～c層に細分される。第4a層はオリーブ黒色粘土質シルトからなる作土層で、層厚は5～20cmある。第4b層は暗オリーブ灰色極細粒砂質シルトからなる水成層で、層厚は15～40cmある。土師器や黒色土器を含む。第4c層は暗オリーブ灰色粘土質シルトからなる作土層で、層厚は20～30cmある。以上の各層のうち、第4a層はRK 4B i 層、NG 4B層に、第4b層はRK 4B ii 層、NG 4B層に、第4c層はRK 4B iii 層、NG 4B層に相当する。

第5層: 暗オリーブ灰色粘土質シルトからなる水成層で、層厚は10～20cmである。本層は植物遺体を多く含む。RK 4C層、NG 4C層に相当する。

第6層: 本層は第6a層の植物遺体を多く含むオリーブ黒色粘土質シルトからなる水成層と、第6b層の暗オリーブ灰色粘土質シルトからなる作土層に細分される。層厚は第6a層が10～20cmで、第6b層は約20cmある。第6a層がRK 7B層、NG 7B ii 層に、第6b層はRK 8A層、NG 7B iii 層に相当する。

第7層: オリーブ黒色シルト～粘土質シルトと灰色極細粒～細粒砂の互層となる水成層で、層厚は40～50cmある。本層は東に向かうほど層厚を増す。RK 9B層、NG 8B層に相当する。

第8層: オリーブ褐色極細粒砂混り粘土質シルトからなる層厚約20cmの暗色帯である。第7層に侵食された場所もあったが、調査区内のほぼ全域に分布していた。本層内でSD 860を検出した。RK 9B層、NG 8B層に相当する。

第9層: オリーブ黒～灰色シルトおよびシルト質粘土からなる水成層で、層厚は20～60cmある。本層は調査区の東側から西側に向かって層厚を増し、上面で溝、小穴、土塊を検出した。RK 9C層、NG 8C層に相当する。

第10層：オリブ黒色シルト～粘土質シルトからなる層厚5～15cmの暗色帯である。本層の上面においてSD100を検出した。RK10A層、NG9A層に相当する。

第11層：本層は第11a層の暗オリブ灰色極細粒砂質シルト層と、第11b層の灰色細粒～中粒砂層に細分される水成層である。層厚は第11a層が30～40cm、第11b層は20cm前後ある。第11a層はRK10B i 層、NG9B層で、本層の上面においてSD113を検出した。第11b層はRK10B ii 層、NG9Bに相当する。

第12層：暗オリブ灰色粘土質シルト～シルト質細礫層で、層厚は40～50cmある。本層の下位はシルト質細礫層に移行している。RK10C iii 層、NG9C ii 層に相当する。

第13層：黒～オリブ黒色粘土質シルト層からなる層厚20cm以上の暗色帯である。RK10C iv 層、NG9C iii 層に相当する。

2) 遺構と遺物

i) 弥生時代前期前葉の遺構と遺物

SD113 調査区のはほぼ中央部に検出した幅0.9m前後、深さ0.25m前後の南西から北東方向の溝である。溝内には暗オリブ灰色粘土質シルト偽礫を含む暗オリブ灰色シルト質細粒砂が堆積していた(図13、図版6)。

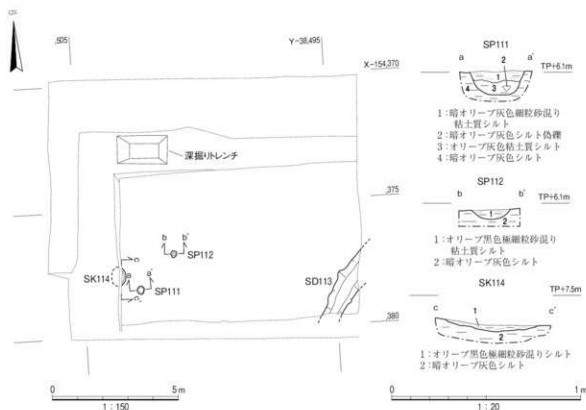


図13 第11層上面検出遺構平面・断面図

SP111 SD113の西側に位置する直径約0.30m、深さ0.15mの小穴で、近くにSP112およびSK114がある。埋土は下から暗オリーブ灰色シルトの偽礫を含むオリーブ灰色粘土質シルトおよび暗オリーブ灰色細粒砂混り粘土質シルトで、柱痕跡および遺物は確認されなかった(図13、図版6)。

SP112 SP111の北東約1.8mに位置する直径約0.2m、深さ約0.1mの小穴である。埋土はオリーブ黒色極細粒砂混り粘土質シルトで、柱痕跡および遺物は確認されなかった。

SK114 SP111の北西約0.6mに位置する直径約0.9m、深さ約0.05mの土壌である。遺構の大半がトレンチで破壊されており、詳細は明らかでない(図13)。埋土はオリーブ黒色極細粒砂混りシルトで、遺物は出土しなかった。以上の遺構はNG9B層に対比される第11層の上面で検出されたことから、弥生時代前期前葉に属するものとみておきたい。

ii) 弥生時代前期後葉の遺構と遺物

第10層は既述したようにNG9A層に対比される暗色帯で、上面の標高は6.3m前後あり、南西から北東方向に微高地状に張り出している。本層は調査地の西方に位置する出戸自然堤防上の弥生時代前期後葉の暗色帯に続く地層であり、本調査では調査期間との兼ね合いもあって調査区の中央部以西のみ調査の対象にして、中央部以東はトレンチ調査にとどめた。本層の上面ではSD100およびNR101を検出した。

SD100 調査区の西部にある幅0.7~1.0m、深さ0.26~0.60m、断面U字形の南北方向の溝である

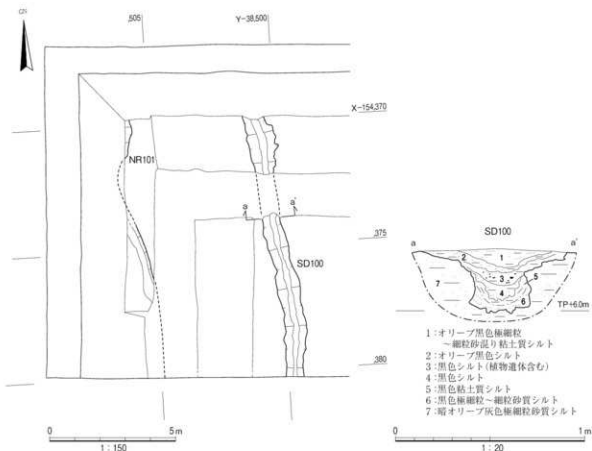


図14 第10層上面検出遺構平面・断面図

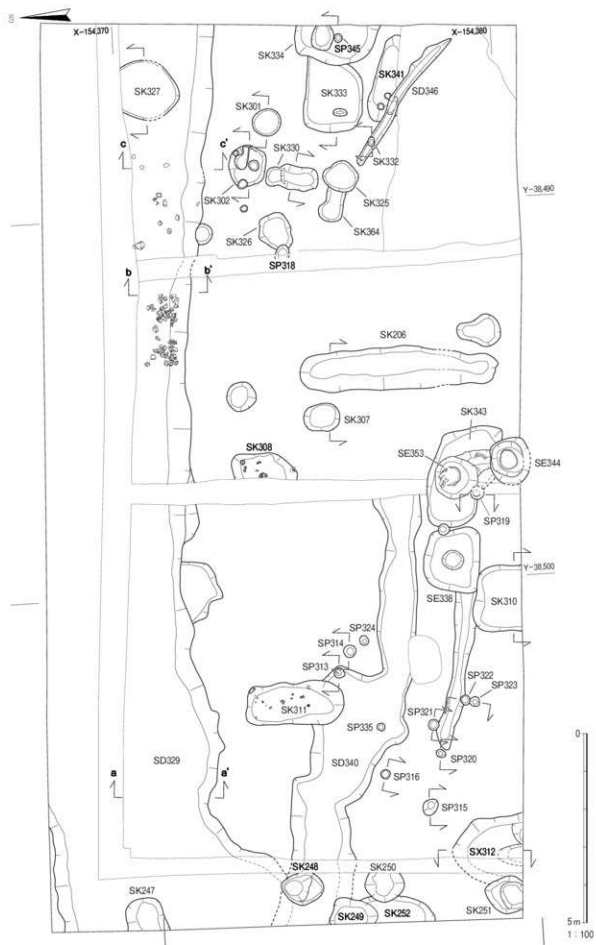


図15 第2層内および第3層上面検出遺構平面図

(図14、図版7)。溝内には下から黒色極細粒～細粒砂質シルト、黒色粘土質シルト、黒色シルト、植物遺体を多く含む黒色シルト、オリブ黒色シルト、オリブ黒色極細粒～細粒砂混り粘土質シルトが堆積していたが、遺物は出土しなかった。

NR101 調査区の西端に位置する幅1.2m以上、深さ約1mの南北方向に蛇行する流路である。流路内には下から灰色細粒混りシルト質細粒砂、灰色極細粒砂質シルト、オリブ黒色粘土質シルトが堆積していた。遺物は出土していない。

iii) 室町～江戸時代初頭の遺構と遺物

当既期の遺構は14～15世紀の遺物を含む第2層の黄灰～暗灰黄色極細粒～細粒砂混り粘土質シルトからなる盛土層の上面で検出したが、一部の遺構については盛土上面から幾分下がった位置から確認されたものもあった。遺構の所属時期は後述するように第2層の上面の遺構は江戸時代初頭(17世紀前期)に、盛土内から検出された遺構は室町時代(15世紀代)に属するものであった。ここでは室町時代、次いで江戸時代初頭のおもな遺構について順を追って報告する(図15・表8・9)。

a. 室町時代の遺構と遺物

SK308 調査区の中央部、SD329の南側約1.1mに位置する短辺0.7m、長辺約1.6m、深さ0.35mの土壌で、遺構の西側約1/2は攪乱されていた(図16)。埋土は下からいり黄褐色細粒～極細粒砂、灰色粗粒砂質シルトで、土師器小皿、瓦質土器羽釜・甕が出土した(図19)。

20～22・24は底部中央がわずかに内に凹む土師器へそ皿で、20・24は底部を欠損している。22の底部はやや平坦におさまっている。以上の4点の土師器小皿の口径および器高はほぼ同じである。20～22は口縁部をヨコナデ、底部をユビオサエで調整しており、内底面の外周に強いヨコナデを加える点は共通する特徴である。また、色調や胎土も酷似することから同時期の資料であろう。

25は瓦質土器羽釜で、わずかに内傾する口縁

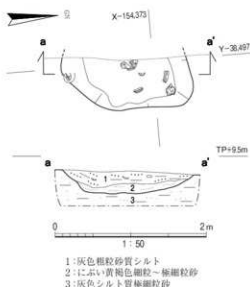


図16 SK308平面・断面図

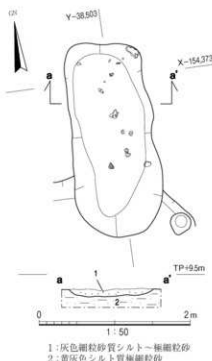


図17 SK311平面・断面図

部外面には3条の凹線状のナデが巡る。口縁端部を面取り、鐙は短い。29は口径約31cmを測るやや大型の瓦質土器羽釜である。わずかに内傾する口縁部の外面に2条の幅広い凹線状のナデが巡る。15世紀前～中葉に属するものである。

SK311 調査区西部に位置する短辺約1m、長辺約2.5m、深さ約0.1mの土壌で、平面形は隅丸長方形である。埋土は灰色細粒砂質シルト～極細粒砂で、瓦質土器羽釜・甕、埴壁片が出土した(図17・19)。

38は瓦質土器羽釜で、わずかに内傾する口縁部の外面に幅広い凹線状のナデとにぶい凹線が巡る。丸味のある体部の外面を横方向にヘラケズリ調整している。15世紀代に属するものであろう。

SK327 調査区の北東部に位置する径約1.5m、深さ約0.2mの土壌である。埋土は下から灰色細粒砂混り粘土質シルト、灰色粗粒～細粒砂混り粘土質シルト、灰色粘土質シルト～細粒砂混り粘土質シルトで、瓦質土器が出土した(図18・19)。

30は瓦質土器羽釜片で、内傾する口縁部の外面には3条の幅広い凹線状のナデが施されている。

SK330 調査区の東部に位置する短辺約0.5m、長辺約1.4m、深さ約0.1mの浅い土壌である。埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルトで焼締陶器が出土した(図18・19)。

36は口縁端部が玉縁状をなす焼締陶器壺である。15世紀後葉に属する物であらう。

SK333 調査区の東部に位置する短辺1.60m、長辺1.75m以上、深さ0.25mの土壌である。埋土はオリブ褐色細粒砂質シルトで、土師器・瓦質土器・瀬戸美濃焼が出土した(図18・19)。

23は口縁部が外上方に開く土師器へそ皿で、底部を欠損している。33は瓦質土器播鉢で、器体外面の調整は横方向のヘラケズリである。37は口縁部が平底の体部から開く瀬戸美濃焼灰釉小皿である。底部の裏面に回転糸切り痕がある。以上の遺物は15世紀前～中葉に属する物であらう。

SK334 調査区の東部に位置する短辺1.0m以上、長辺2.3m、深さ0.30mの大型の土壌であるが、遺構の大半は調査範囲外である。埋土はオリブ褐色細粒砂質シルトで、瓦質土器が出土した。

35は瓦質土器播鉢で器体の内面の播目は粗い。外面の調整は左上から右下方向のヘラケズリである。

SK341 調査区東部に位置する短辺0.6m以上、長辺約2.3m、深さ0.25mの土壌で、遺構の南部は江戸時代の掘込みで攪乱されていた。平面形は隅丸長方形で、埋土はオリブ褐色シルト質細粒砂である(図15)。凹面に模痕痕のある平瓦片41が出土した(図19)。

SK343 調査区の中央南部に位置する短辺約1.5m、長辺約2.5m、深さ0.40m前後の平面形が不整形な土壌である(図15)。土壌の中央部をSE353が掘り込んでいる。埋土は暗オリブ灰色シルト偽礫混り細粒～粗粒砂質シルトで、瓦質土器や瓦が出土した(図19)。

26～28は瓦質土器羽釜で、わずかに内傾する口縁部の外面に2～3条の幅広い凹線状のナデが巡る。体部の調整は外面が横方向のヘラケズリで、内面は横方向のナデである26以外は横方向のハケである。31・32・34は瓦質土器播鉢で、ともに体部外面の調整は横方向のヘラケズリで、内面の播目は粗く、間隔も広い。39の瓦質土器甕の口縁部は玉縁状に丸くおさめたもので、体部の外面は横方向の平行タタキで、内面は右上がりのハケで調整している。40は焼き歪んだ平瓦の破片で、凹面には離砂が残る。以上の遺物の所属時期は瓦質土器からみて15世紀代であらう。

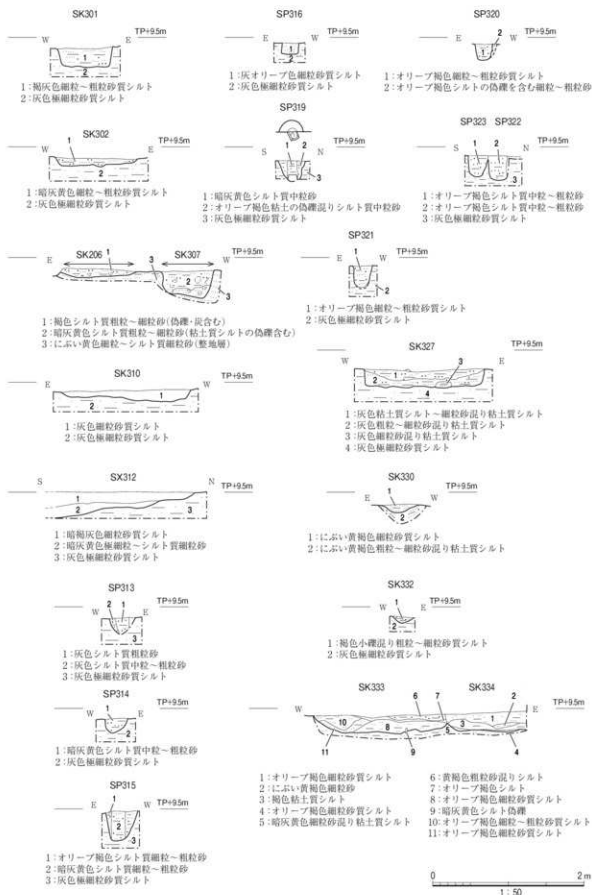


図18 第2層基底面検出土壌・柱穴・小穴平面・断面図

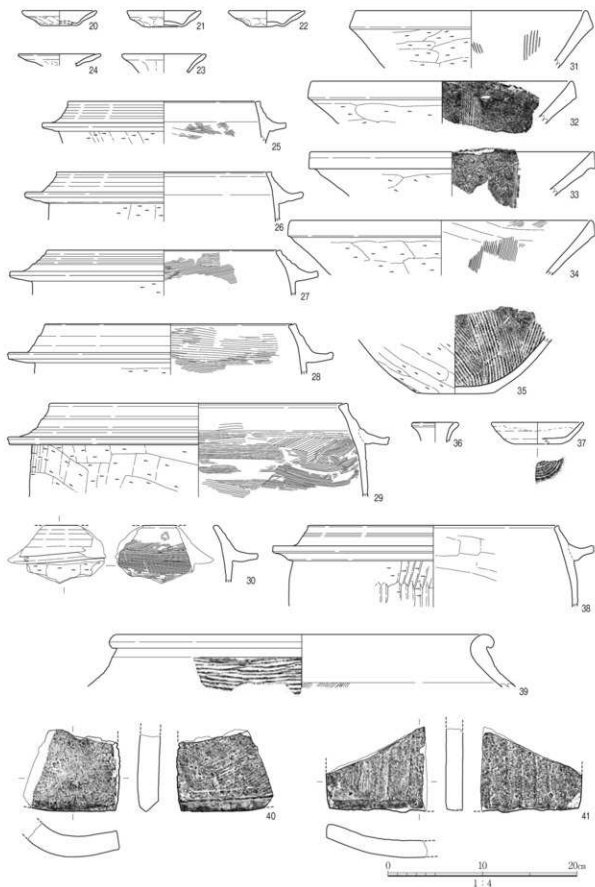


圖19 SK308・311・327・330・333・334・341・343出土遺物実測図

SK308(20・22・24・25・29), SK311(38), SK327(30), SK330(36), SK333(23・33・37), SK334(35), SK341(41)・SK343(26・28・31・32・34・39・40)

SE338 調査区南部の中央よりに位置する井戸である。平面形が隅丸方形を呈する長辺1.60m、短辺1.30m、深さ約1.8mの掘形の中央部に直径1m前後の桶を2段以上積んで井戸側になっていた可能性が高い。桶は腐敗して原形を留めていなかった。掘形の埋土は暗オリーブ灰色極細粒砂質シルトの偽礫からなり、井戸側内の底近くに機能時堆積層のオリーブ灰色シルト質極細粒砂が堆積していた(図20)。遺物は桶の断片が少量出土したのみである。

SE344 調査区中央南部に位置する井戸であるが、遺構の南側はシートパイルによって破壊されていた(図15・21)。掘形は直径1.1~1.3m、深さ約2.2mあり、その中央部に直径約0.57m、高さ約0.56mの瓦質土器井戸側を2段以上設置してあったようである(図22)。掘形の埋土はシルトの偽礫を含む暗オリーブ灰色シルト~極細粒砂で、井戸側内には機能時堆積層の暗オリーブ灰色シルト質極細粒砂が堆積していた。井戸の廃棄時の埋土である暗灰黄色極細粒砂質シルトから土師器小皿、瓦質

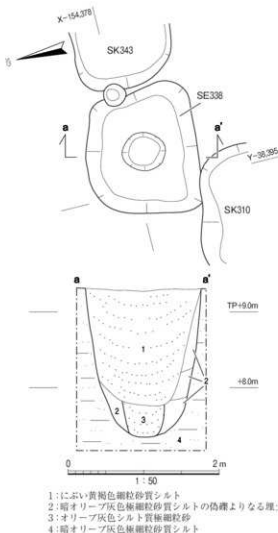


図20 SE338平面・断面図

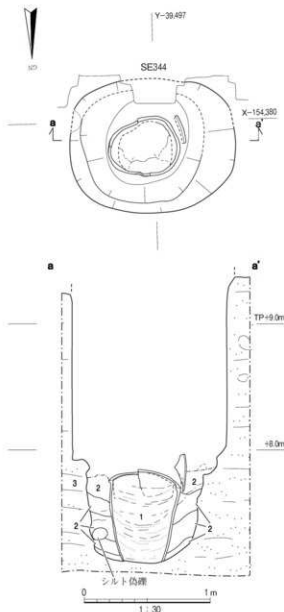
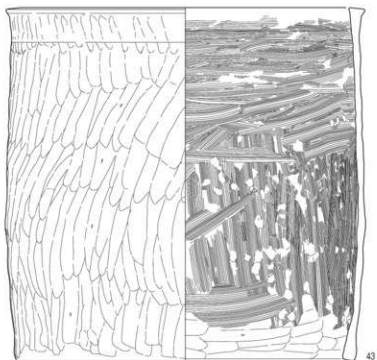
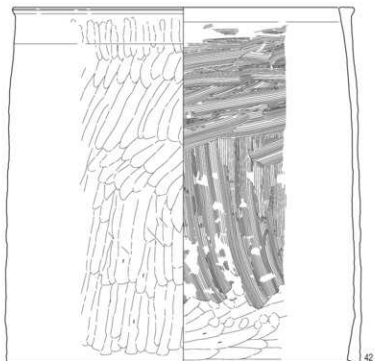


図21 SE344平面・断面図

土器羽釜・埴鉢が出土した(図23)。

42・43は瓦質土器井戸側で、口径は前者は約54cm、後者が約52cmある。器高は42・43ともに約56cmで、器壁は口縁部および基部が体部に対して厚い。器面の調整は42・43ともに外面が右上がりのナ



0 1:6 30cm

図22 SE344井戸側実測図

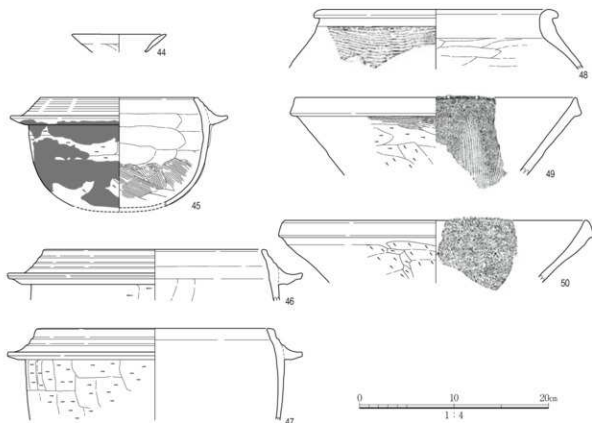


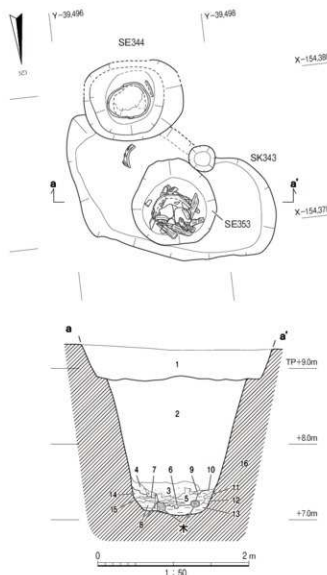
図23 SE344出土遺物実測図

デで、内面は縦から横方向の粗いハケである。口縁部の内外面を幅広いヨコナデ、基部の内面は横方向にナデで調整している。15世紀代に属するものであろう。

44はへそ皿の可能性のある土師器小皿である。口縁部の内外面をヨコナデ調整している。45～47は瓦質土器羽釜である。小型の45以外は口径が大きい。口縁部が内傾し、外面に凹線状のナデが3条以上施された45・46は、口縁端部を面取り、外面の凹線状のナデが少ない47に先行する型式である。49・50は瓦質土器搥鉢で、ともに体部の外面を左上がりから右方向にヘラケズリ調整しており、内面の描目はやや粗である。口縁部の形態は50がわずかに膨らみ、49は強いヨコナデで凹む。48は瓦質土器甕で、口縁部は頸部から玉縁状に短くおさめる。体部の外面を右下がりの平行タタキで整形しており、内面は横方向のナデで調整している。以上の土師器および瓦質土器は15世紀前葉～中葉に属するものであろう。

SE353 調査地区の中央南部、SE338の東側に位置する井戸である。掘形の平面形は不整形で、南北1.3～1.6m、東西約2.7m、深さは検出面から約2.3mある。埋土は第2層の偽磔を多く含む暗灰黄色粘土質シルトで、井戸側の内部は水溜めの直上まで攪乱されており、暗オリーブ色粘土質シルトで埋めてあった。

水溜めは直径0.1m前後、長さ0.4～0.6mの樹皮付きの材を井桁に組み上げて設置しており、オリーブ灰色極細粒～オリーブ灰色極細粒砂質シルトが堆積していた(図24)。遺物は掘形内から瓦質土器55が、井戸側内の下部から土師器51、瓦質土器52～54・56・57、瓦58および木製品59～65が出土した(図25・26)。



- 1:オリブ灰色シルト偽埋泥り細粒～粗粒砂質シルト(SK343埋土)
- 2:暗オリブ灰色粘土質シルト(埋土)
- 3:オリブ灰色極細粒砂(細粒砂含む)(水成層)
- 4:灰色シルト質極細粒砂(水成層)
- 5:オリブ灰色シルト質極細粒砂(水成層)
- 6:オリブ灰色極細粒砂(水成層)
- 7:暗オリブ灰色シルト(表込め)
- 8:暗オリブ灰色シルト質極細粒砂(表込め)
- 9:灰色シルト(水成層)
- 10:暗オリブ灰色粘土質シルト(表込め)
- 11:暗オリブ灰色シルト質粘土(表込め)
- 12:暗オリブ灰色極細粒砂質シルト(表込め)
- 13:暗オリブ灰色シルト(表込め)
- 14:暗オリブ灰色粘土質シルト(表込め)
- 15:暗オリブ灰色シルト(表込め)
- 16:暗オリブ灰色粘土質シルト～細粒砂質シルト

図24 SE353平面・断面図

裏面には高台の外れた跡がある。61は隅丸方形を呈する容器の底板とみられるもので、表裏面には側板を結束するための複数の孔を穿っている。また、底板の表裏面には組板に転用されていたことを示唆する多くの傷が見られる。材は板目取りである。62～65は水溜めに使われた部材である。62は径約5cm、長さ約58cmで、先端を細くして、表面を縦方向に削っている。63・64も径約6cmの丸太材で、

51は底部を欠損した土師器小皿である。口縁部の形態からみて、いわゆるへそ皿であろう。

55は瓦質土器甕で、玉縁状の口縁部は内傾する体部から短い頸部を経て丸くおさめる。体部の外面を平行タタキで整形し、内面は横方向のハケで調整している。53・54は内傾する口縁部の外面に凹線状のナデが2～3条巡る瓦質土器羽釜である。甕を水平におさめており、体部の外面は横方向の断続的なヘラケズリで調整している。頸部の内面は53が右上がりのハケのあと、横および斜め方向のナデで、54はヨコナデで調整している。52は瓦質土器播鉢の底部で、内面の播目は粗い。外面の調整は右下がりから横方向のヘラケズリである。56は玉縁状の口縁部が短く立つ頸部から短く開く瓦質土器甕である。体部外面は平行タタキで整形しており、内面の調整は横方向のハケである。57は基部径約52cmの瓦質土器井戸側である。体部の調整は外面が縦方向のナデで、内面は横方向のナデのあと、右上がりのハケである。SE353の井戸側の残欠であろう。58は平瓦で、凹面・凸面ともに不定方向のナデで整えている。高温で焼成されており、表面の一部があばた状になっている。

59は枝を利用した吊り具で、上部を欠損しているが、吊り手の側は調整している。60は椀の底部で、内面は炭化しており、

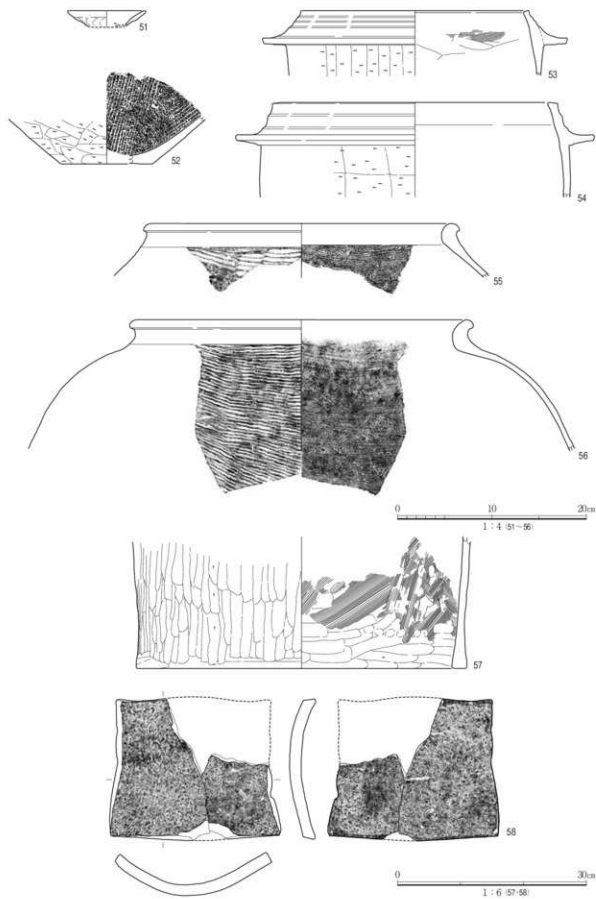


图25 SE353出土遺物実測図(1)

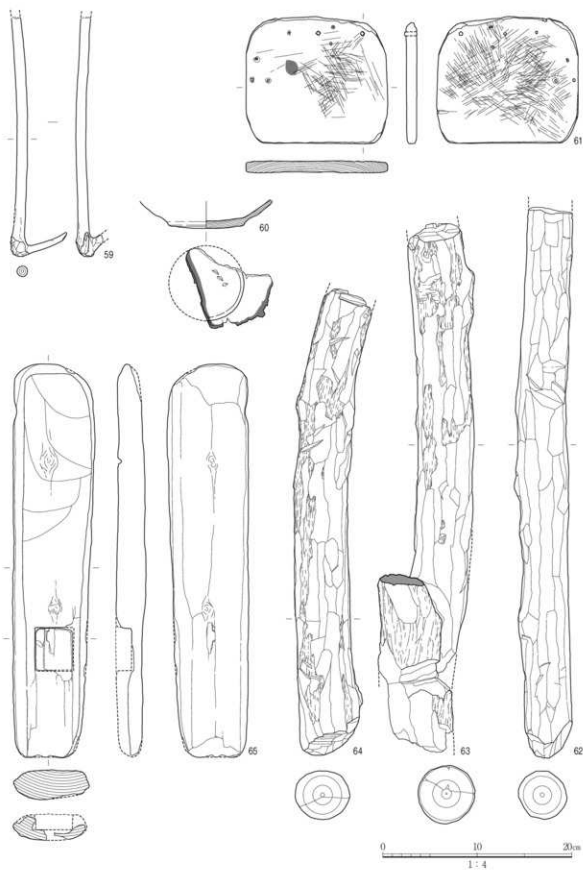


图26 SE353出土遺物実測図(2)

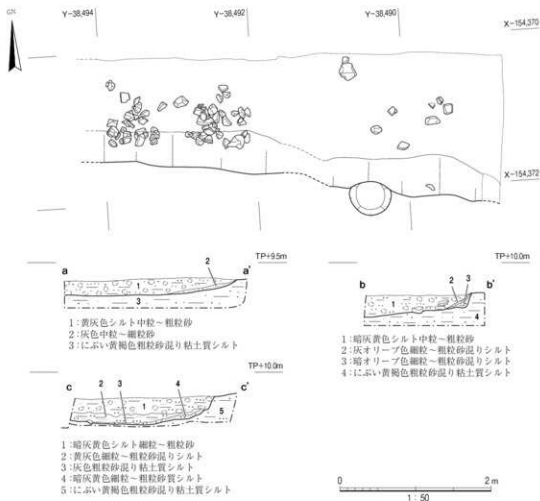


図27 SD329遺物出土状況平面・断面図

表面を縦方向に削るが、一部に表皮が残っている。65は幅約8.5cm、長さ41.6cm、厚さ約3cmの材である。一端に切断痕および臍穴が見られるほか、切断面からみて、柱の転用材であろう。

以上の出土遺物のうち、瓦質土器は15世紀前～中葉に属するもので、SE344と同時期と考える。

SD329 調査区の北部に位置する幅4.5～6m、深さは検出面から0.3m前後の東西方向の溝である。

本溝は調査区の西端部で南に折れ曲ることが確認された(図15・27)。溝内には機能時堆積層の暗灰黄色細粒～粗粒砂質シルト、灰色粗粒砂混り粘土質シルト、灰～黄灰色細粒～粗粒砂、黄灰～暗灰黄色シルト質細粒～粗粒砂が堆積しており、須恵器、土師器、瓦質土器、白磁、備前焼、瓦、砥石、石臼などが出土した(図28・29・30)。

66は瓦質土器井戸側で、口縁部を逆台形状に肥厚している。67は須恵器甕の体部片で、外面は平行タタキで整形している。内面には当具痕がある。68は口縁部が短く開く白磁皿で、高台は底部の外縁部の近くにある。

69・70は備前焼播鉢で、口縁部の外端面に3～4条の凹線文が巡る。71は備前焼播鉢の底部の細片である。72～74は土師器羽釜である。72・73の口縁部は鐙部から直立しており、口縁端部を面取る。74の鐙は突起状を呈しており、体部の調整は外面がヨコナデで、内面は左上がりのハケのあと、横方向のハケである。75～77は瓦質土器羽釜である。75・76は内傾する口縁部の外面に2～3条の凹線状

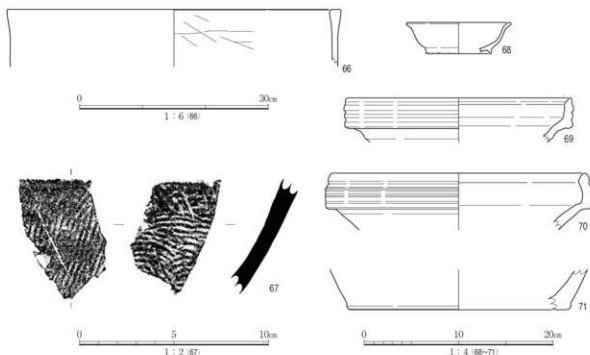


図28 SD329出土遺物実測図(1)

のナデが巡る。76の体部の調整は外面が横方向のヘラケズリで、内面は横方向のハケのあと、右上がりのナデである。77の口縁部は水平に伸びる鋸から丸く内傾して立つ。口縁端部を丸くおさめており、口縁部の下端に2条の沈線が巡る。78～81は瓦質土器揃鉢で、78・79はともに口縁部が内傾した面をなす。体部外面の調整は78は縦方向のヘラケズリで、79は横方向のナデである。内面には78・79ともに粗い掘目がある。80・81は底部で、外面をヘラケズリで調整しており、内面には粗い掘目がある。

82・83は瓦質土器甕で、82の口縁部は内傾しながら伸びる体部から丸くおさめている。体部の外面を横方向の粗い平行タキで整形し、内面は横方向のハケで調整している。83の口縁部は張りのある体部から直立する頸部を経て短く開く。体部の外面を粗い横方向の平行タキで、内面をヨコナデ調整している。84は口縁部が大きく開く体部から湾曲して立つ瓦質土器鉢で、口縁端部は内側に肥厚している。

85は均整唐草文が施された軒平瓦片である。86・87は丸瓦片で、凸面を縦方向のナデで調整しており、内面には布目が残る。86・87ともに端部をヘラで面取る。88は平瓦で、凸面に離砂があり、凹面は模骨の跡を粗いナデで整えている。

89は長さ約6cm、幅4.3cm、最大厚約2cmを測る砥石である。石材は粘板岩であろう。90は直径約30cmに復元される石臼(上臼)で、中央に直径約5cmの軸孔を穿つ。掘目の幅は1cm前後あるが、磨減して浅くなっている。石材は花崗岩である。

以上の多岐に渡る遺物のうち、白磁皿68は明朝末期、備前焼揃鉢69は備前IV期、土師器羽釜72～74は16世紀前葉、瓦質土器羽釜75は15世紀代、瓦質土器羽釜76、甕82・83、瓦質土器揃鉢78・79、瓦質土器鉢84は16世紀前葉に属するものであろう。これは室町時代の後葉頃とみられる軒平瓦85および丸瓦86・87、平瓦88の年代観とも矛盾しない。

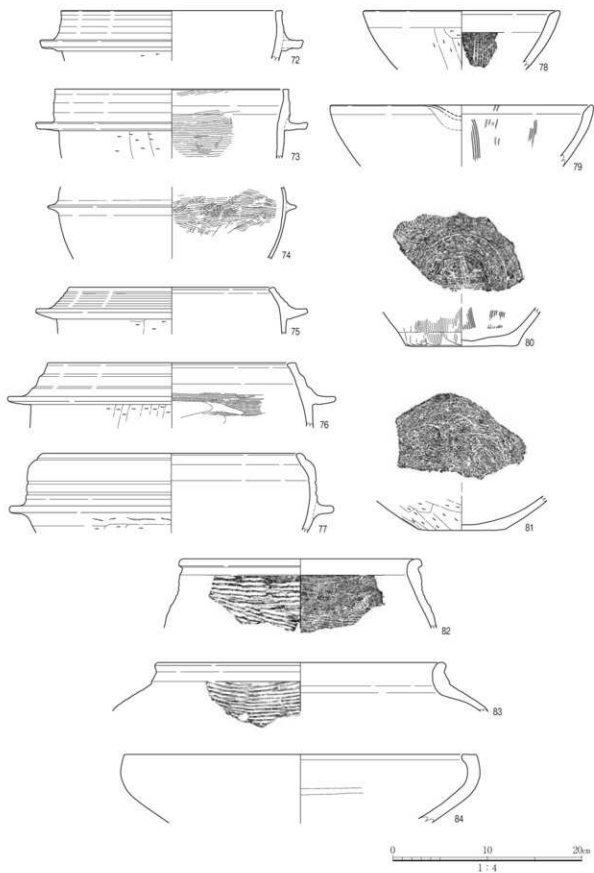


图29 SD329出土遺物実測図(2)

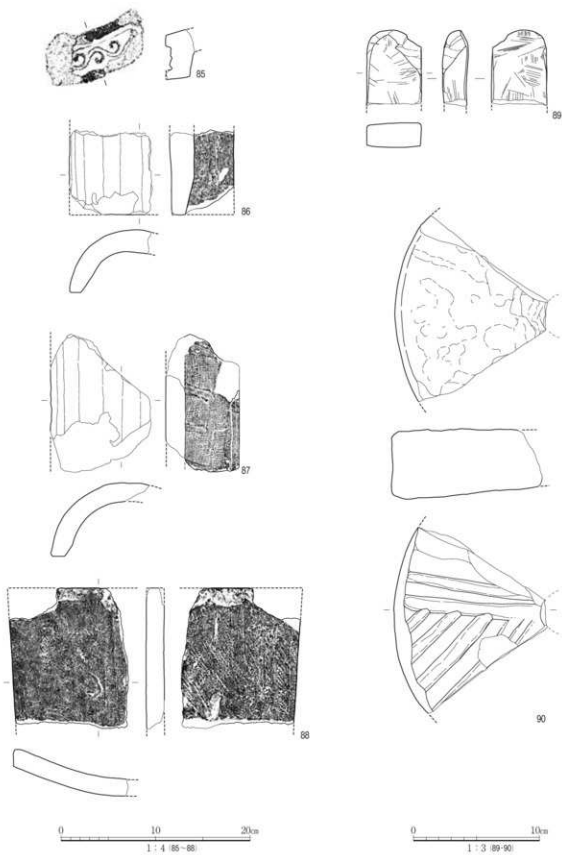


图30 SD329出土遗物实测图(3)

本溝は幅が約6mに達すること、底が平坦で機能時堆積層が水成層で、その下位層が部分的に泥土化していること、調査区内で溝の西端が南に曲がることなどの諸点からみて、屋敷地を区画する濠の可能性はある。本調査ではSD329の南側で15世紀～16世紀前葉にかけての井戸、土壇、小穴など、集落に関わる遺構が検出されたが、これも上述した溝の性格を裏付けするものといえる。

SX312 調査区の西南隅に位置する東西・南北とも約2m、深さ0.4mの落込みである。遺構の底には不整形な小さな穴があることから樹木の根痕かもしれない(図15・18)。埋土は暗褐色細粒砂質シルトで、瓦質土器が出土した(図31)。

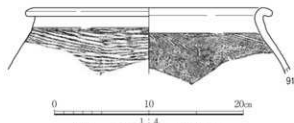


図31 SX312出土遺物実測図

91は口縁部が頸部から丸く外反した瓦質土器甕である。体部の外面を右下がりの平行タタキで整形し、内面は左上がりのハケで調整している。15世紀前～中葉に属するものであろう。

b. 江戸時代初頭の遺構と遺物

SK206 調査区の中央南部に位置する短辺0.7～1.1m、長辺5.2m、平面形が隅丸長方形で、深さが検出面から0.2m前後ある細長い土壇である。遺構東南部の底面では、口縁部を下にした肥前陶器小皿9枚を中国産青花皿で覆ったものが確認された(図32、図版13)。埋土は上から炭化物を含む暗灰黄色細粒砂質シルト、暗灰黄色細粒砂混り粘土質シルトで、ともに意図的に埋め戻されたものである。

92～100は口径10.7～11.5cm、器高2.60～3.20cmの肥前陶器小皿である。これらの高台内には「〇」の墨書があるほか、92・93の内面には胎土目がある。94～96・98の口縁部には内から外に向かったの打ち欠きがある。また、99の高台には打ち欠きが1箇所ある。101は口径20.4cm、器高4.0cmの中国産青花皿で、口縁部から体部には漆継ぎによる補修痕がある。内面の染付は渦を巻く水流に架かる橋の中央に実を付けた神木があり、これの左右に花卉およびつゆ草とみられる植物が描かれている。明朝末期に属するものと考える。以上の遺物の出土状況や時期からみて、SK206は土壇内に口縁部や高台の一部を打ち欠く肥前陶器小皿9枚を一組にして重ね置いたあと、中国産青花皿で蓋をし、埋めたものと考えられる。いわゆる信仰や宗教的な儀式に関わる埋納壇とみてさしつかえないものであろう。埋納壇の時期は肥前陶器小皿の型式からみて、江戸時代初頭(17世紀前葉頃)と考えられる。

3) 各層出土の遺物

i) 第4層出土の遺物

102・103は瓦質土器羽釜である。102は内湾する口縁部の外面に2条の沈線が巡る。鈿は水平で、体部の調整は外面が横方向のヘラケズリで、内面は横方向のナデである。103は内傾した口縁部の外面に2条の幅広い凹線状の浅いナデが施されており、体部の調整は外面が横方向のヘラケズリで、内面は右から左上がりのハケである。104は土師器鍋で、わずかに内湾する口縁部は頸部から大きく開く。体部の調整は内外面とも横方向のナデである。105～107は瓦質土器播鉢で、105の口縁部はわずかに

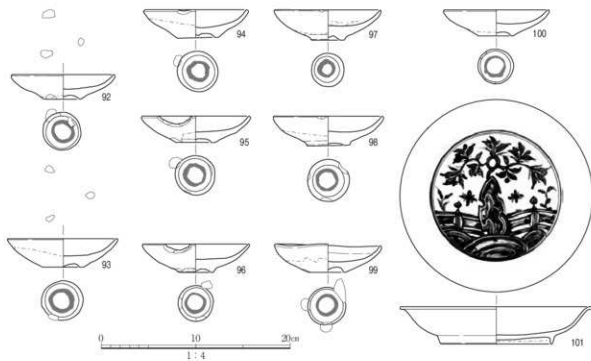
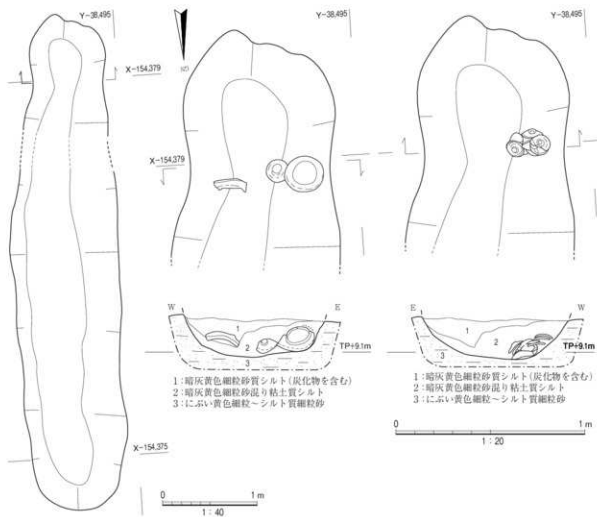


図32 SK206平面・断面および出土遺物実測図

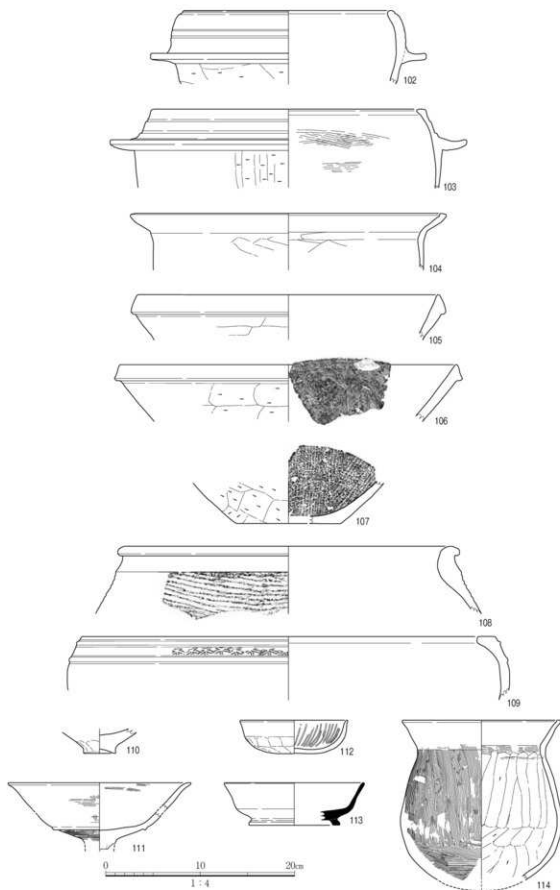


圖33 第4・7層出土遺物実測図
第4層(102~109)、第7層(110~114)

丸くおさめており、体部の外面の調整は横方向の粗いナデである。107は底部で、外面は右下がりのヘラケズリで、内面の揃目は粗い。106は口縁部の外端面が凹む瓦質土器揃鉢で、体部の外面の調整は横方向のヘラケズリである。内面の揃目は粗い。108は瓦質土器甕で、口縁部は内傾して立つ体部から直立する頸部を経て丸くおさめている。体部の外面を粗い平行タタキで整形しており、内面の調整はヨコナデである。109は内傾する口縁部の上端面を水平におさめた瓦質土器火鉢で、口縁部の外面を2条の突帯で区分して、「花文」状のスタンプ文を施している。いわゆる「奈良火鉢」と呼ばれているものである。

以上の遺物のうち、瓦質土器羽釜102、土師器鍋104は16世紀前葉に属するものであろう。瓦質土器羽釜103・揃鉢105～107、甕108は15世紀中～後葉に、火鉢109は15世紀前葉に属するものであろう(図33)。

ii) 第7層出土の遺物

110は弥生土器の壺底部で、外面をユビオサエで整えている。111は杯体部下端に突帯状の段のある土師器高杯で、内外面に細かいハケメが残る。112は土師器杯Aで、底部外面をユビオサエで整えており、内面には正放射暗文を施している。113は須恵器杯Bで、口縁部の器壁厚は底部に比べて薄い。高台は外方に踏ん張るものである。114は土師器甕で、丸底の器体から口縁部は外上方に直線的に開く。器体外面の調整は底部が横方向のハケで、体部は縦方向のハケである。器体内面の調整は底部から頸部にかけて縦方向のナデで、頸部の内面には断続的なヨコハケが残る。

以上の遺物の時期は、壺底部110が弥生時代後期末、高杯111は古墳時代前期末～中期前葉、土師器杯A112・甕114は飛鳥時代(7世紀中葉)、須恵器杯B113も飛鳥時代(7世紀後葉)に属するものとみておきたい(図33)。

4) 小結

NG09-2次調査区では古墳時代前～中期、飛鳥時代の遺物が出土したほか、弥生時代中期の溝、室町時代では屋敷地を区画する濠の可能性があるSD329や、SE344・353、SK308・311・327・330・333・341・343などの各種の遺構を検出した。これらの15世紀代に属する瓦質土器を伴う遺構群は当地域が室町時代の集落域内に当たることを示している。

一方、長原遺跡で初出となった江戸時代初頭に属する中国産青花皿で蓋をした9枚の肥前陶器小皿を埋納したSK206は、小皿の口縁部や高台を打ち欠くことや高台内に墨書の「○」があることなどから、信仰や宗教的な儀式に関わる埋納遺構の可能性が有る。

第3節 NG09-3次調査

1) 基本層序

本調査では層厚が20～150cmの現代の盛土層(第0層)以下5.5mまでの層序を確認したが、第16層については深掘りトレンチで確認した地層である(図35・36)。

第1層：褐色シルト質極細粒砂で、層厚は20～40cmある。本層は現代の作土層で、RK1層、NG1層に相当する。

第2層：褐～にぶい黄褐色シルト質極細粒砂および細粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は60～180cmある。本層の上面で南北方向の切石積の溝を、層内から肥溜、土壌などを検出した。18～19世紀の肥前陶器・磁器が出土した。また、調査区の東部において本層準の暗褐～黄褐色を呈する細粒～極細粒砂質シルトからなる厚さ5～20cmの薄い整地層が9枚前後重なった南北方向の赤坂神社の旧参道を検出した。RK2層、NG2層に相当する。

第3層：褐灰～暗オリーブ灰色

極細粒砂質シルト～粘土質シルトからなる作土層で、層厚は25cm前後ある。上部に植物の根や酸化鉄の沈着が見られる。本層から18世紀頃の土師器焙烙が出土しており、上面ではSD301を検出した。RK3層、NG3層に相当する。

第4層：オリーブ灰色細粒砂質シルト～シルト層で、層厚は15cm前後ある。本層の上面では落込みおよび植物による擾乱が見られた。室町時代の瓦質土器羽釜が出土した。RK3～4A・B層、NG3～4A・Bに相当する。

第5層：暗オリーブ灰～灰色シルト質極細粒～中粒砂層で、層厚5～20cmの水成層である。RK5層、NG5A・B～6A層に相当する。

第6層：本層は第6a・b層に細分される。第6a層は暗オリーブ灰～暗青灰色極細粒砂質シルト層

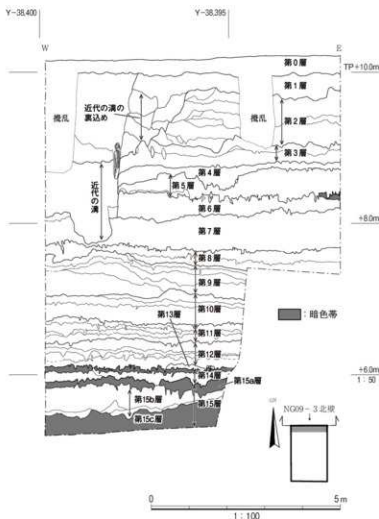


図34 NG09-3次調査北壁地層断面図

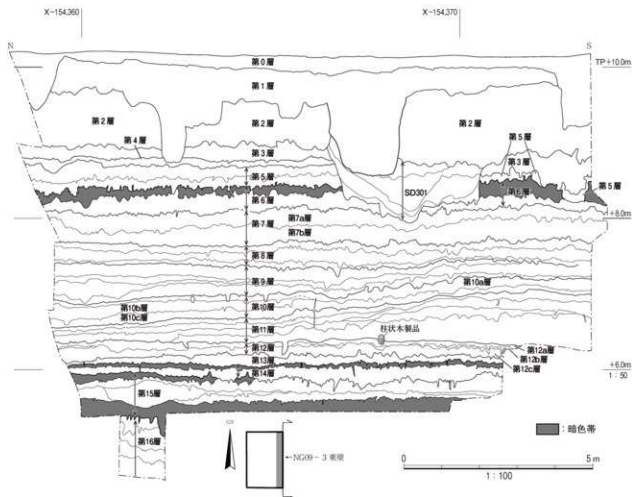


図35 NG09-3 次調査東壁地層断面図

で、層厚は20cm前後ある。本層はあばた状に暗色化する水成層で、上面に踏込みが見られる。第6b層は暗オリーブ灰～灰色極細粒砂質シルト～シルト層で、層厚は20～30cmある。本層は暗色化した地層で、下面に踏込みが見られる作土層である。RK6A層、NG6A～7A層に相当する。

第7層：本層は第7a・b層に細分される。第7a層は暗オリーブ灰～暗緑灰色細粒砂混り粘土質シルトからなる水成層で、層厚は30～40cmある。第7b層は暗オリーブ灰色極細粒砂質シルトで、層厚は15cm程ある。下位の第8a層を侵食するように堆積する水成層である。RK6B層、NG6B～7A層に相当する。

第8層：本層は第8a～c層に細分される。第8a層は黒色粘土質シルトからなる作土層で、層厚は10cm前後ある。第8b層は暗オリーブ灰色シルト質粘土からなる水成層で、層厚は5～20cmある。第8c層はオリーブ灰～緑灰色シルト質粘土～極細粒砂からなる水成層で、層厚は10cm前後ある。調査区の中央部から南部にかけて岩相がやや暗色化したシルト質粘土層に移行していた。RK6C層、NG6B～7A層に相当する。

第9層：暗緑灰色極細粒砂質シルト、灰色細粒～粗粒砂からなる植物遺体を多く含む水成層で、層厚は20～50cmある。RK7A層、NG7B0層に相当する。

第10層：本層は第10a～c層に細分される水成層である。上面の標高はTP+6.7～7.2mあり、調査

表6 NG09-3 次調査の層序

層序	岩相	層厚 (cm)	自然現象ほか	おもな遺構	おもな遺物	時代	長原標準層序との対比
第0層	現代遺土および埋土	20~150	築土層			現代	RK0層 NG0層
第1層	褐色粘土質極細粒砂	20~40	作土層	→切石積の溝		現代	RK1層 NG1層
第2層	褐色粘土質極細粒砂 →粗粒砂質シルト	60~180	築地層	▽土塊・肥田	陶磁器	江戸時代	RK2層 NG2層
第3層	暗緑灰色シルト質極細粒砂質シルト →粉土質シルト	25	作土層	→SD001	焼物		RK3層 NG3層
第4層	オリーブ灰色極細粒砂質シルト～シルト	15	堆積土	→落込み	瓦貫土器	室町時代	RK3-4A層 NG3-4A-B層
第5層	暗オリーブ灰～灰色シルト質極細粒～中粒砂	5~20	地質による変質				RK5層 NG5A-B-6A層
第6a層	暗オリーブ灰～暗赤灰色極細粒砂質シルト	30	暗色帯 (植物遺体を含む)	→落込み			RK6A層 NG6A-7A層
第6b層	暗オリーブ灰～灰色極細粒砂質シルト～シルト	20~30	作土層	→落込み			RK6A層 NG6A-7A層
第7a層	暗オリーブ灰～暗緑灰色極細粒砂質粘土質シルト	30~40	水成層				RK7A層 NG7B0層
第7b層	暗オリーブ灰～暗緑灰色極細粒砂質シルト	15	水成層				RK7B層 NG7Bii層
第8a層	暗赤粘土質シルト	10	水成層				RK8A層 NG7Bii層
第8b層	暗オリーブ灰色シルト質粘土	5~20	水成層				RK8C層 NG6B-7A層
第8c層	オリーブ灰～緑灰色シルト質粘土～極細粒砂	10	水成層				RK8C層 NG6B-7A層
第9層	暗緑灰色極細粒砂質シルト 灰色細粒～粗粒砂	20~50	植物遺体を含む				RK7A層 NG7B0層
第10a層	暗緑灰色極細粒砂質シルト	10	水成層	NR701	柱状木製品	縄文時代	RK7A層 NG7B0層
第10b層	暗緑灰色極細粒砂質シルト	15	植物遺体を含む				RK7B層 NG7Bii層
第10c層	暗緑灰色極細粒砂質シルト	10	植物遺体を含む				RK7B層 NG7Bii層
第11層	上位:暗緑灰～暗オリーブ灰色シルト～シルト質粘土 下位:オリーブ黄色極細粒～粗粒砂	20~60	植物遺体を含む	→落込み			RK8A層 NG7Bii層
第12a層	灰～オリーブ灰色シルト	10~15	水成層				RK8B層 NG7Bii層
第12b層	灰～オリーブ灰色粘土	5	水成層				RK8B層 NG7Bii層
第12c層	灰色シルト質粘土～シルト質極細粒砂	5~15	水成層				RK8C層 NG7Bii層
第13層	灰色粘土～シルト	5~15	水成層				RK8C層 NG7Bii層
第14a層	黒色粘土	5	暗色帯				RK9A層 NG8A層
第14b層	暗緑灰色極細粒砂質シルト質粘土	5~20	水成層				
第15a層	暗緑灰色シルト～極細粒砂質シルト	10~20	古土壌				RK9B層 NG8B層
第15b層	暗緑灰色極細粒砂質シルト～粗粒砂	10~30	水成層				RK10A層 NG9A層
第15c層	黒色シルト質粘土	30	暗色帯				RK10B層 NG9B層
第16a層	褐色シルト質極細粒～極細粒砂質シルト	30	→落込み				
第16b層	オリーブ褐色シルト質極細粒～粗粒砂	10~25	水成層				RK10C層 NG9C-i層
第16c層	に黄褐色シルト～極細粒砂質シルト	10~20					
第16d層	オリーブ褐色シルト質極細粒砂	25以上					

→:上面積出遺構 ↓:下面積出遺構 ▽:地層内検出遺構

区の南東から北西に向けて下がっている。各層とも樹木の枝や植物遺体を多く含むほか、上面や下面で動物の足跡が確認された。第10a層は緑黒色極細粒砂質シルト層で、層厚は10cm前後ある。上面でNR701を検出した。本層内から後述するような柱状木製品が出土した。RK7A i層、NG7B0層に相当する。第10b層は暗緑灰色極細粒砂質シルト層で、層厚は15cm前後ある。RK7A i層、NG7B0層に相当する。第10c層は緑黒色極細粒砂質シルト層で、層厚は10cm前後ある。RK7B層、NG7B ii層に相当する。

第11層:本層は上位が暗緑灰～暗オリーブ灰色シルト～シルト質粘土層で、下位に向けて岩相がオリーブ黄色極細粒～粗粒砂層に移行する。上位に植物遺体を多く含む水成層である。層厚は20~60cmあり、下位の粗粒砂層の層厚は南側が北側より厚い。なお、下位の粗粒砂層から第10層の中段まで達する地震による噴砂が確認された。RK8A層、NG7B iii層に相当する。

第12層:本層は第12a～c層に細分される水成層である。第12a層は灰～オリーブ灰色シルト層で、層厚は10~15cmある。本層の中心には極細粒砂の薄いラミナおよび、層中に0.1cm未満の炭酸鉄の白粒が見られるほか、上面で踏込みを確認した。RK8B層、NG7B iii層に相当する。第12b層は灰～オリーブ灰色粘土層で、直径0.1~0.2cmの黄白色のシルト質粘土の偽礫を含む。層厚は5cm前後ある。RK8B層、NG7B iii層に相当する。第12c層は灰色シルト質粘土～シルト質極細粒砂層で、植物遺体や

粘土質シルトの偽礫を含む。層厚は5～15cmある。本層の上面の標高はTP+6.3～6.4mを測り、ほぼ平坦な面をなしている。RK8C層、NG7Biii層に相当する。

第13層：灰色粘土～シルト層で、層厚は5～15cmある。RK8C層、NG7Biii層に相当する。

第14層：本層は第14a・b層に細分される。第14a層は黒色粘土層からなる暗色帯で、層厚は5cm前後ある。本層の上面では乾痕が、地層内で植物の根痕が見られた。上面の標高はTP+6.1m前後で、

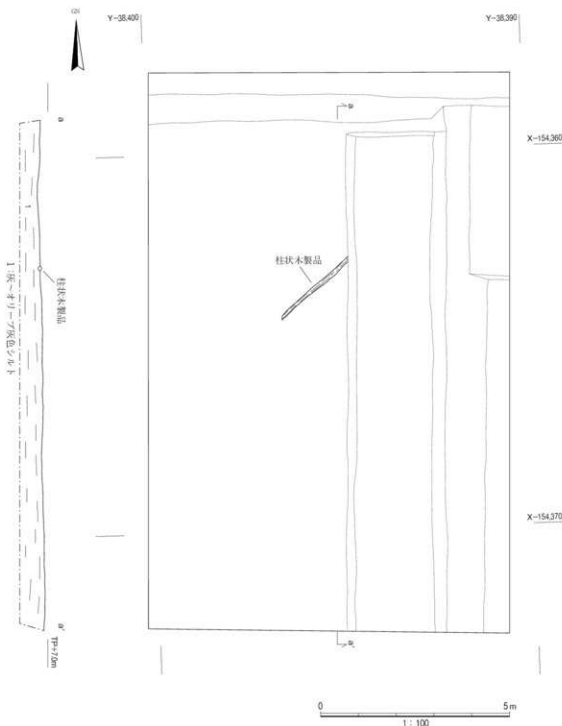


図36 NR701柱状木製品平面・断面図

平坦な面をなしている。第14b層は暗緑灰色極細粒砂混りシルト質粘土からなる水成層で、層厚は5～20cmある。第14a層は岩相や標高および周辺の調査地の層序と比較して、RK9A層、NG8A層に相当すると推定される。

第15層：第15a～c層に細分される。第15a層は暗緑灰色シルト～極細粒砂質シルトからなる暗色帯で、層厚は10～20cmある。本層の上面の標高はTP+5.8～5.9mあり、乾痕が確認された。RK9B層、NG8B層に相当する。第15b層は暗緑灰色極細粒砂質シルト～粗粒砂からなる水成層で、層厚は10～30cmある。本層は上位から下位に向って岩層が極細粒砂質シルト～粗粒砂に移行する。RK10A層、NG9A層に相当する。第15c層は黒色シルト質粘土からなる暗色帯で、層厚は20cm前後ある。上面の標高はTP+5.6m前後あり、地層内で植物の痕跡が見られた。岩相や標高および上下の層率からみて、RK10B層、NG9B層に相当すると推定される。

第16層：本層は第16a～d層に細分される。第16a層は褐色シルト質極細粒～極細粒砂質シルトからなる水成層で、層厚は20cm前後ある。本層中には上位層からの踏込みが確認された。第16b層はオリーブ褐色シルト質極細粒～細粒砂からなる水成層で、層厚は10～25cmある。第16c層はにぶい黄褐色シルト～極細粒砂質シルトからなる水成層で、層厚は10～20cmある。第16d層はオリーブ褐色シルト質極細粒砂からなる水成層で、層厚は25cm以上ある。以上の地層はRK10C層、NG9C i～iii層に相当するものであろう。

2) 遺構と遺物

i) 飛鳥時代の遺構と遺物

NR701 調査区内を南東から北西方向に流れる流路で、その兩岸は調査区外である。流路のおもな堆積層は第10a～c層、第11～13層に相当する水成層であるが、流路の検出面においては調査範囲内では明らかにできなかった。第10a層の緑黒色細粒砂質シルト層から樹木の枝や葉、植物遺体に混在して倒れたような状態で柱状木製品が出土した(図36・37、図版15)。

115は最大長255.0cmの柱状木製品で、樹種はサカキである。頭部とみられる側を幅4cm程の鉄器で2～3cm削り込んで頭部を成形している。頭部は直径約10cmで、その下は直径約8.5cmある。段から約10～25cm間に斜めおよび横方向の切込みがある。この切込みを正面から見ると鼻や口の表現がなされているように思われる。つまり柱の上端に頭と顔を刻んだように見えるものである。なお、柱状木製品の下端は斜めに

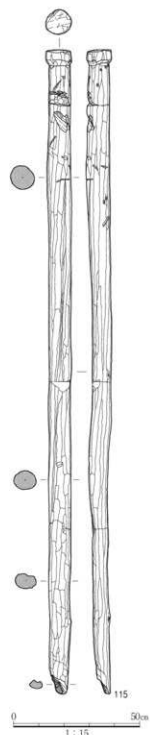


図37 NR701出土柱状木製品
実測図

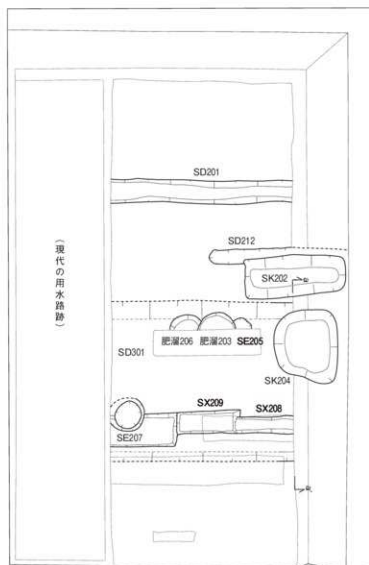


Y-38,400

Y-38,390

X-154,360

X-154,370



0 5m
1:100

SD301



TP+9.0m

+8.0m

- 1: 黄灰～暗灰黄色細礫混り極細粒砂質シルト偽礫地
- 2: 灰～灰オリーブ色粘土質シルト
- 3: 暗オリーブ灰色細礫混り細粒砂質シルト
- 4: 暗オリーブ灰色細粒砂混り粘土質シルト
- 5: 暗オリーブ灰色極細粒～細粒砂質シルト

図38 第2層上面検出遺構平面およびSD301断面図

切断したあとで表面を焼いていること、頭部から約1.65m以下を半切したように加工していることから、柱状木製品は本来地面に立てられていた可能性が高い。木製品の時期は、出土層率がRK7A i 層、NG7B0層に相当することから飛鳥時代と考える。

ii) 室町時代の遺構

SD301 調査区の南部に位置する幅4.2m前後、深さ1m前後の東西方向の溝である。本溝の掘込み面は東壁断面で観察したところ、第3層の上面であることが判明した。今回の調査では第2層の上面で第1回目の遺構の検出作業をした段階では、SD301の掘込み面は確認できなかった。これは、第2層準の遺構の掘込みとSD301が重複した箇所が多かったことも本溝が平面的に確認できなかった要因となっている。ここではおもに溝内の地層の堆積状況について報告しておきたい。

SD301の溝内には下から機能時堆積層の暗オリーブ灰色極細粒～細粒砂質シルト、暗オリーブ灰色細粒砂混り粘土質シルト、暗オリーブ灰色細粒混り細粒砂質シルト、灰～灰オリーブ色粘土質シルトが堆積しており、この上を黄灰～暗灰黄色細粒混り極細粒砂質シルト偽礫、黄灰色中粒砂混り極細粒砂質シルト偽礫、灰色細粒砂質シルト偽礫、オリーブ灰色シルト偽礫、オリーブ黒色極細粒砂質シルト偽礫、黒色細粒混りシルト質極細粒砂偽礫などで埋めていた。以上の埋土の上に第2層が客土されていたほか、東壁際には後述する江戸時代のSK204に掘り込まれていた。

SD301の時期は、機能時堆積層から15世紀代の瓦質土器羽釜が出土したことから、NG09-2次調査地で検出した室町時代の屋敷地を区画する濠とみられるSD329と同様の溝と考えられる。

iii) 江戸時代の遺構と遺物

江戸時代の遺構や遺物は第2層の上面で検出した図38に示すような溝・井戸・土壇・肥溜などがある。これらの時期は江戸時代後期～末期に属するものであった。ここでは遺構の性格の判明したものについて報告しておく。

SK202 調査区の中央東部に位置する短辺約1.2m、長辺約2.7m以上、深さ約0.4mの平面形が長方形の土壇である(図38)。埋土は灰黄色シルトで、肥前磁器116～119、ミニチュア土鍋121などが出土した。116は外面に梅を染付けた碗、117は内底面に蛇ノ目軸剥ぎで高台が露胎の染付碗、118は内底面に蛇ノ目軸剥ぎ、外面に草を染付けた底部の厚い碗、119は体部の外面に「〇」に花卉の染付、高台に3条の圈線が巡る碗で、底部裏面には崩れた文字がある。121は吊手孔や片口、短い脚などが表現されたミニチュア土鍋である。以上の遺物は18世紀後葉に属するものであろう(図39)。

SK204 SK202の南側に位置する直径約2m、深さ約1mの土壇で、遺構の大半は調査範囲外である。埋土は上下に分かれ、下層は機能時堆積層の水つきの黄灰色中粒砂混り極細粒砂質シルト、暗灰色極細粒砂質シルト、暗灰色シルト、にぶい黄褐色細粒砂混りシルト質極細粒砂で、上層は埋め土の褐色極細粒砂質シルト、暗灰黄色細粒砂混り極細粒砂質シルト、黄灰色シルト質極細粒砂、灰色細粒砂混りシルト質極細粒砂などである。遺物は上層から肥前磁器染付碗120、土師器焙烙122、丹波焼播鉢123が出土した。

120は体部の外面に枯れ草の染付と2条の圈線が巡る肥前磁器染付碗で、二次的な火を受けて釉が灰白色に変色している。122は土師器焙烙で、口縁部の外面を粗い左上がりのハケで調整している。

123は外上方に直線的に開く体部から口縁部の外端面を下方に拡張した丹波焼播鉢である。内面の描目は粗い。122・123ともに18世紀後葉に属するものであろう(図39)。

SE205 SK204の西側に位置する直径0.6m、深さ約1mの井戸とみられる遺構である。掘形は素掘りで、井戸側内には灰色極細粒砂質シルトが堆積していた。肥前磁器125～128・35、肥前陶器136、瀬戸美濃焼137、土師器142～144、瓦147、簀148、縄193が出土した(図40・41、図版28)。

125～128は肥前磁器染付碗で、127・128の内底面には蛇ノ目軸測ぎがある。135は肥前磁器赤絵油壺で、口縁部を欠損している。136は肥前陶器碗で、内底面には胎土目が残る。137は瀬戸美濃焼碗で、灰白色の施軸をしている。142～144は土師器焙烙で、142は1条、143は2条の口縁部と体部の境界に突帯が巡り、144は体部の上端近くを横方向のヘラケズリで調整している。147は鬼瓦の外縁部の細片とみられるもので、直径約3.8cmの2個の朱文と同サイズの円孔を穿つ。

148は最大長12.0cmの真鍮製の簀で、頭部の上端には耳かきがある。頭部は板状で、足は断面円形である。

193は最大径約1.8cm、長さ約8.0cmの縄である。個別に撚った3本の細縄を撚り合せて1本の縄にしている(図版28)。

以上の遺物のうち、室町時代の鬼瓦の細片147以外は、18世紀前～中葉の範疇に属するもので、148も同時期のものであろう。

SE207 調査区の西南部に位置する直径約2mの掘形内に直径約0.7mの桶を設置して井戸側にした井戸である。井戸側内にはオリーブ黒色極細粒砂質シルトが堆積しており、肥前磁器129・131、瀬戸美濃焼139、土師器145、金属器149、石製品151、瓦153が出土した(図40・41)。

129・131は肥前磁器染付碗で、131にはコンニャク印判が見られる。139は瀬戸美濃焼鉢の底部である。139の高台は露胎で、内底面には胎土目の痕跡がある。145は土師器焙烙で、体部の上端にはに

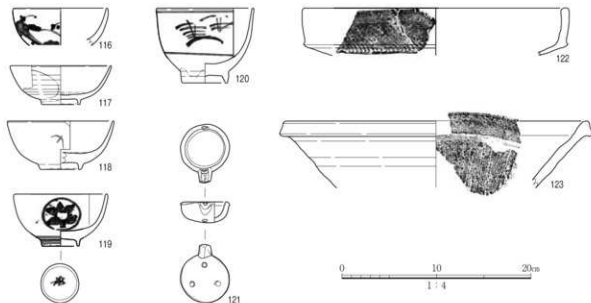


図39 SK202・204出土遺物実測図
SK202(116～119・121)、SK204(120・122・123)

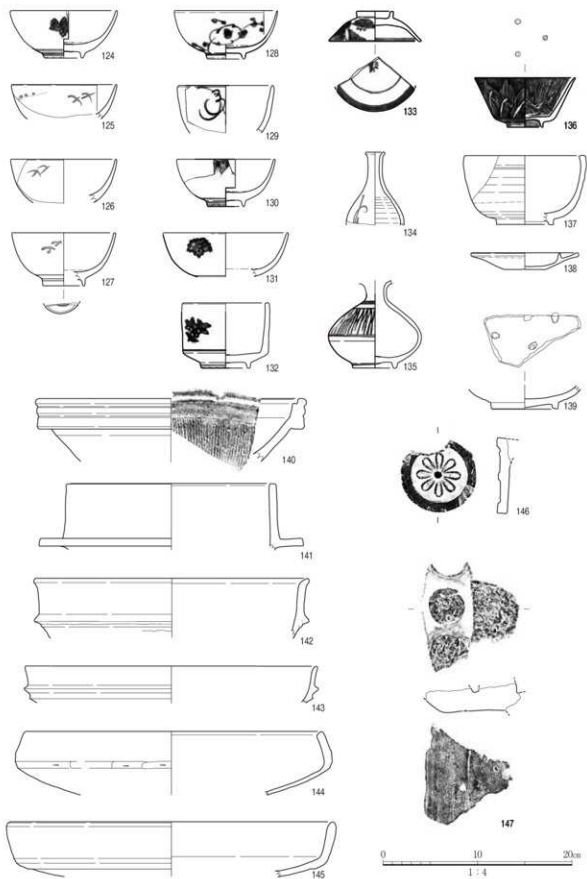


图40 SE205·207, 肥溜203·206出土遺物実測図(1)

SE205(125~128·135~137·142~144·147), SE207(129·131·139·145),
肥溜203(124·132~134·140·141), 肥溜206(130·138·146)

ぶい段がある。口縁端部を丸くおさめている。149は残存長16.3cm、最大幅2.7cmを測る先端と中茎の一部を欠損した片刃の庖丁である。151は残存長10.9cm、幅5.3cmの砂岩製の砥石で、使用によって湾曲している。

153は最大長27cm、最大幅25.4cmの井戸瓦で、器体の凸面側に4列の刻目がある。

以上の遺物のうち、肥前磁器染付碗129・131、瀬戸美濃焼鉢139は18世紀前～中葉に属するものと

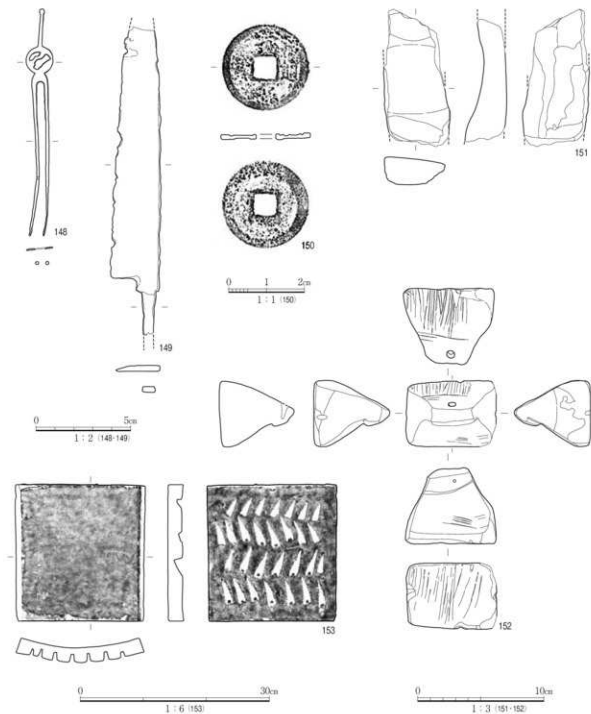


図41 SE205・207、肥溜203・206出土遺物実測図(2)

SE205(148)、SE207(149・151・153)、肥溜203(150)、肥溜206(152)

みられる。

肥溜203 SE205の西側に位置する直径および深さ共に約1mの掘形に一回り小さな樽を埋設した肥溜とみられる遺構である。埋土は灰色シルト質極細粒砂で、肥前磁器124・132～134、堺搦鉢140、土師器141、銭貨150が出土した(図40・41)。

124は肥前磁器染付碗、132は肥前磁器染付筒形碗、133は肥前磁器染付皿、134は肥前磁器染付徳利で、体部の下半を欠損している。140は堺搦鉢で、口縁部の外端面に2条の沈線が巡る。搦目は密である。141は土師器羽釜で、鐙は短く水平に伸びる。口縁部は直立しており、端部を面取る。150は寛永通寶で、表面の文字の鋳出しが悪い。

以上の遺物のうち、肥前磁器染付124・132～134は18世紀中葉に、堺搦鉢140、土師器羽釜141は18世紀末～19世紀前葉に属するものと思われる。

肥溜206 肥溜203の西側に位置する遺構で、直径約0.8m、深さ約1mある。埋土は暗青灰色極細粒砂質シルトで、肥前磁器130、瀬戸美濃焼138、瓦146、石製品152が出土した(図40・41)。

130は肥前磁器染付碗で、内底面に蛇ノ目軸刺しが、底部から高台には3条の圈線が巡る。138は瀬戸美濃焼灯明皿で、内面から口縁部の外面直下まで施釉されている。146は瓦当面の上端を一部欠損した道具瓦の小菊である。152は凝灰岩を台形に削って成形した幅7.2cm、高さ約6cmの分銅状の石製品である。頭部は摘み状に成形されており、片面から穴を穿つが未完である。器体の表裏面および側

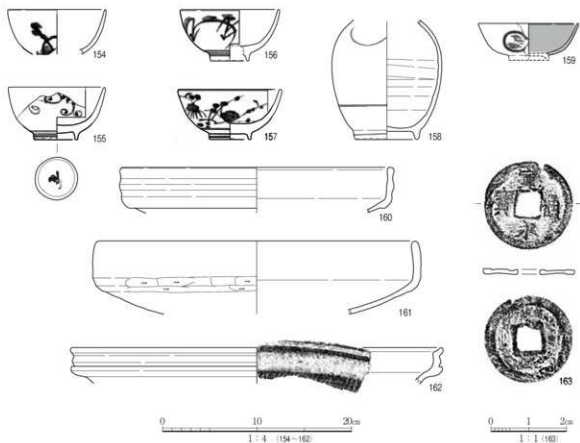


図42 SD201出土遺物実測図

面には調整痕がある。

以上の遺物のうち、肥前磁器や瀬戸美濃焼は18世紀前～中葉に属するものであろう。

SD201 調査区北部に位置する幅約0.7m、深さ約0.8mの東西方向の溝である。溝内には下から灰色細礫泥り細粒砂質シルト、黄灰色中粒砂泥り細粒砂質シルト、暗灰色極細粒砂質シルト、暗灰色シルトが堆積していた。肥前磁器154～158、土師器160・161、丹波焼162、漆碗159、銭貨163が出土した(図42)。

154～157は肥前磁器染付碗である。157の絵柄は後述する第2層出土の肥前磁器染付碗166の絵柄に酷似している。両者は内底面に蛇ノ目軸剥ぎがあり、法量が若干異なるものの、同一窯の製品の可能性が高い。156も内底面に蛇ノ目軸剥ぎがある。158は肥前磁器染付徳利で、高台の設置面は一部露胎である。器体の外面には施釉のあと、上半にU字線状、下半から高台に時計回りの圈線が巡る。

159は底部を欠損した漆碗で、内面が朱漆、外面は黒漆である。外面には「〇」に松の絵を描く。

160・161は底部の大半を欠損した土師器焙烙である。160の口縁部外面にはヨコナデにより幅広い凹線状を呈する。161の口縁部はわずかに内傾しており、口唇部を丸くおさめている。口縁部外面の下端から底部を横方向にヘラケズリ調整しており、器体の全体に二次的な火を受けている。

162は丹波焼播鉢の破片である。口縁部は体部から一旦立ったあと、上端近くで短く開く。口縁部の外端面には2条の沈線が巡る。

163は直径2.4cm、最大厚0.15cmの寛永通寶である。方格ならびに表面の文字の鋳出しが悪い。

以上の遺物の時期は肥前磁器が18世紀中～後葉に属するものであろう。

3) 各層出土の遺物

i) 第2層出土の遺物(図43・44)

164は瀬戸美濃焼磁器染付小碗である。165～174・176は肥前磁器染付で、165～174は碗、やや口径の大きい171の内底面にはコンニャク印判による五弁花が見られる。175は肥前青磁皿である。176は肥前磁器染付皿で、内面に山水が描かれている。177は瀬戸美濃焼磁器鉢で、内底面に蛇ノ目軸剥ぎが、器面に貫入が見られる。178は肥前陶器小杯である。179は肥前陶器三鳥手鉢で、器体の内外面に直線および波線を描く。180～182は土師器焙烙で、180の器体の中程には1条の突帯が巡る。181の口縁部の外面にはタタキメが残る。182は口縁端部を丸くおさめ、底部の厚みが体部の器壁に対して極めて薄く成形されている。183・184・186は丹波焼播鉢である。播目は183が8本、184は6本、186は10本である。口縁部を183は上下に拡張しており、184および186は下方に拡張している。186の口縁部の外端面には2条の粗い凹線が巡るほか、内底面には円×の播目がある。185は堺播鉢で、口縁部を上下に拡張しており、同外端面にはふい3条の凹線が巡る。播目は8本である。187は土師器羽釜で小型である。口縁部はわずかに内傾しており、端部を丸くおさめる。鐏は短く、体部にわずかに下向きに貼り付けており、器体の外面には煤が付着している。188は口縁部の直下に鐏が付く土師器羽釜である。器体の内外面をヨコナデ調整しており、内面にはコゲが見られる。189は道具瓦の小菊で、花卉は8葉ある。190・191は巴文軒丸瓦で、前者の巴は後者に比べて長い。朱文も前者は

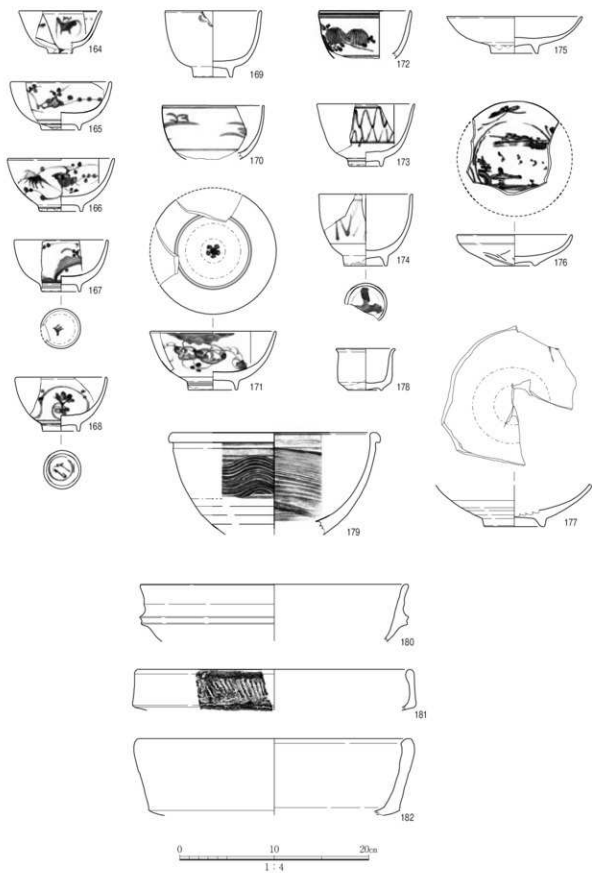


图43 第2层出土遗物实测图(1)

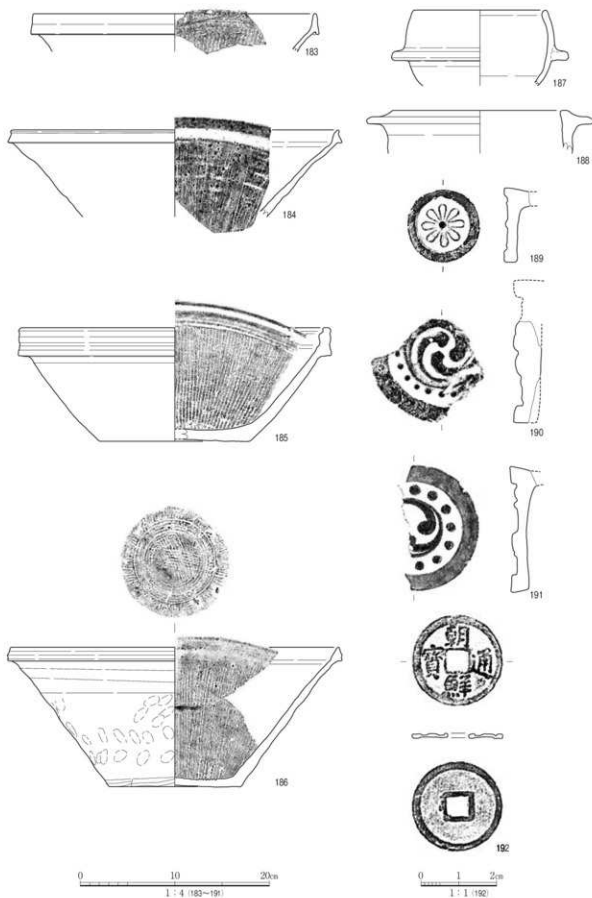


图44 第2層出土遺物実測図(2)

後者に比べて小さく、数が多い。

192は朝鮮通寶で、楷書体長字であり、初鑄年代は1423(李氏朝鮮世宗5)年である。

以上の遺物のうち、肥前磁器・陶器、丹波焼、瀬戸美濃焼などは19世紀前半以降に属するものであろう。朝鮮通寶や巴文軒丸瓦190は室町時代に遡るものと考ええる。

4) 小結

NG09-3次調査区では流路内ではあるが、頭部に鼻や口を表現したとみられる柱状木製品が出土したほか、第3層の上面で確認された幅約4mの東西方向のSD301は規模や方向からみて、調査区の西方にあるNG09-2次調査地で検出した屋敷地の区画溝の可能性の高いSD329と同様の溝の可能性がある。また、長原遺跡で初出となった朝鮮通寶は鑄造年代からみて当地域に中世集落が形成された時期に搬入された可能性の高いものである。

一方、第2層の上面で検出した江戸時代後～末期の遺物を含む井戸・溝・土壇・肥溜などは当地域が江戸時代中期以降になって農業を生業とした集落へと成長したことを物語っている。

摘要	自然现象	
----	------	--

(大阪市文化財協会2009bより)

第三章 調査結果の検討

今回の調査では先述したようにNG09-3次調査区で飛鳥時代のNR701の中から頭部にヒトの鼻や口を表現したものと思われる柱状木製品が出土したほか、NG09-2次調査区では室町時代の溝で区画された屋敷地が検出された。これらの遺物や遺構は六反地域では初出といえ、当地域の歴史的な変遷を明らかにするうえで注目すべき資料となった。加えてNG09-1・2次調査区で検出された弥生時代前期および中期の溝は、今回の調査地の西方に位置する出戸自然堤防上に営まれた弥生時代前期以降の集落域と当地域の関係を明らかにするための注意すべき遺構といえる。本項では長原遺跡で初出となった柱状木製品について若干の検討を加えておきたい。

1) 柱状木製品の用途

柱状木製品115は調査区内を南東から北西方向に流れる飛鳥時代の流路であるNR701に堆積した第10a層の緑黑色細粒砂質シルト層から樹木の枝や葉、植物遺体に混在して倒れたような状態で出土した。このため、元あった場所や用途については出土状況からは明らかにできなかった。ただし、木製品は大きな損傷を受けていないことや下端の加工痕などからみて、ほぼ原形を留めているものと考えられる。また、木製品は最大長が255.0cmもあることから、建物の柱材にしてはやや長いように思われた。加えて頭部を2~3cm削り込んで成形していることや頭部の段から約10~25cm間に口や鼻など、ヒトの顔を表現したのではないかと推定される斜めおよび横方向の切込みがあることも本木製品が建築用材以外に用いられたことを示唆している。所属時期は柱状木製品より新しいが、柱状木製品の形状に類似するものとして、朝鮮半島の李氏朝鮮時代に盛行した集落の出入り口に立てられたチャンスと呼ばれる男女一対の柱状の木偶がある。チャンスは一本木にヒトの顔が彫刻されており、長原遺跡の柱状木製品の頭部の切込みがヒトの顔を表現したものであるならチャンスとの外見上の共通点

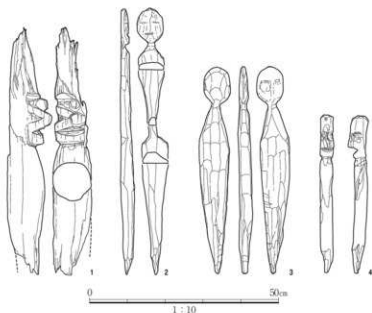


図45 縄文時代後期～古墳時代中期の木偶の諸例

1：蔀内遺跡、2・3：烏丸崎遺跡、4：豊中遺跡

として注目される。さらに、チャンスンも長原遺跡の柱状木製品も宗教的な意味を持つ木製品であり、地面に立てて用いることも共通している。

一方、日本列島内に目を転じると樹皮を剥がし、彫刻をした一本を地面に立てる習俗は遅くとも縄文時代の前期後葉には始まっていたことが石川県の真脇式土器に相伴したクリ材を使った全長

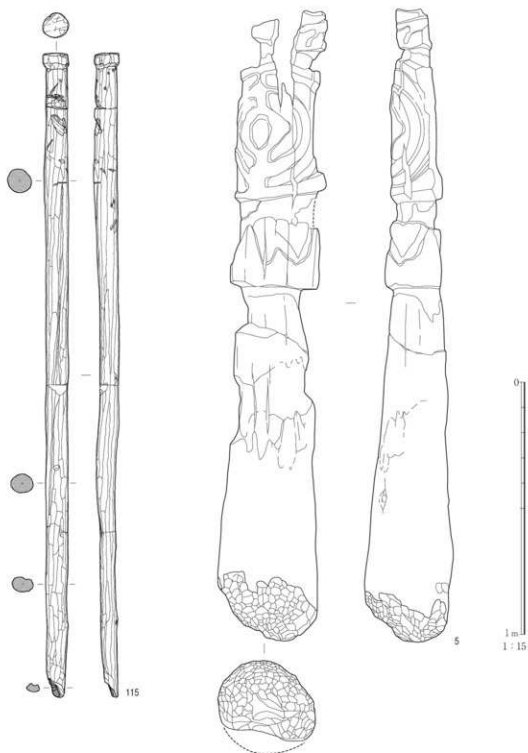


図46 柱状木製品およびトータル・ポール様木製品実測図

5：真脇遺跡、115：長原遺跡

2.52m、根元に近い部位の最大径が0.45mある彫刻柱から推測される[能都町教育委員会1986・橋本澄夫1990]。この木製品は根元を0.5mほど埋めて、地上には2mほど出ているものと想定されている。木柱の上半部には三帯の隆体と、楕円を囲む二重の三日月形が、下段には山形の彫刻が施された、一見、ヒトの顔を彫刻したトーテム・ポール様木製品である。同様の木製品は、岩手県の蔦内遺跡の縄文時代後期のトーテム・ポール様木製品と呼ばれているものに酷似している[奈良国立文化財研究所1993]。蔦内遺跡のトーテム・ポール様木製品も一木の上半に目・鼻・口などヒトの顔を彫刻したものとみられており、800基余りの土壌墓群のかたわらより出土したことから墓標の一種ではないかと指摘されている[森川昌和・橋本澄夫1994]。このほか、石川県の縄文時代晩期のチカモリ遺跡では縦割りした断面カマボコ形のクリ材を環状に立て並べた巨大な木柱列が検出されており、同様な木柱列については環状列石(ストーンサークル)のような聖域を区画した施設あるいは集団の祭祀や儀式、集会の場となった特殊な建造物とする見方がある[森川昌和・橋本澄夫1994]。

小林達雄氏はチカモリ遺跡や真脇遺跡で検出された円形巨木柱列について、材を縦割りし、木芯を除くのは材を真っすぐに維持することを意図したものであり、木柱の太さと天に向かってそそり立つ偉容を示すところに意味があったと指摘している[小林達雄1986]。縄文時代の彫刻柱や木柱列と、長原遺跡の柱状木製品とは年代の開きが大きく、また後者の柱状木製品は単体で出土したため、双方の結びつきについては断定しがたいが、ともに地面に立てて使われた点は共通する要素であり、その意は上述した縄文時代以来の立柱祭祀の延長上にあるものと想定される。

一方、滋賀県鳥丸崎遺跡の弥生時代中期前～中葉の木偶および同県湯ノ部遺跡の弥生時代中期後葉の木偶は厚みのある板を削ってヒトの頭部と胴体を作り出しており、縄文時代の彫刻柱とは大きさや木取りの方法が異なっている[奈良国立文化財研究所1993]。ただし、弥生時代の木偶も下端を尖らせることから地面に立てて使った可能性が高く、この点は長原遺跡の柱状木製品と相通じる点といえよう。弥生時代の木偶もヒトの頭部や顔を彫刻する点では縄文時代の彫刻柱と変わらないが、木製品自体の大きさも随分違うほか、使用する材が一木と板状という違いもある。弥生時代の木偶が小型化した背景には、弥生時代の社会は縄文時代の狩猟と採集を経済基盤とする集団社会と違って、水稻耕作を経済基盤にした農耕社会であり、当時の精神文化の一端を伝える木偶の用途も異なっていたことを示唆しているのであろう。

古墳時代の柱状木製品あるいは木偶とみられる事例は少ない。管見による限り、大阪府泉大津市豊中遺跡から出土した古墳時代中期の全長42cm、直径約4cmを測る樹皮を剥がした小振りの木の一端にヒトの顔を彫刻し、片方の先端を尖らせた木隅がある[池上曾根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会1996]。素材の長さや太さは異なるものの、ヒトの顔を彫刻する豊中遺跡の例は、長原遺跡の飛鳥時代の柱状木製品の先行形態として、また用途を考えるうえで興味深い資料である。木偶の用途については即断しがたいものの、下端が尖っていることから何らかの祭祀に伴い地面に立てられたものと考えられる。樹皮を剥がして、ヒトの目鼻や口を彫刻し、首を刻んだ円柱様の身部は、縄文時代の彫刻柱と相通じるものがある。

以上のように大きさや形状は異なるものの、長原遺跡の柱状木製品がヒトを表現したものであるな

ら、その系譜は既述したように古墳時代中期および弥生時代中期の木偶、さらに縄文時代前期の彫刻柱まで遡る可能性がある。これらの彫刻柱・木偶・柱状木製品については、各々の時代の精神文化を今に伝えるのみでなく、それらを地面に立てる宗教的な習俗が縄文時代以来列島社会のなかで連綿と命脈を保っていたことを示唆している。

一方、現代の韓国の事例ではあるが、シャーマンの祭祀で、「杵邑」と呼ばれる領域(神域)を画する際にその四方に立てる法守(ボムス)と呼ばれる木製品と長原遺跡で出土した柱状木製品が類似していることを漢江文化財研究院の呉昇桓氏から教えていただいた。現代に伝わる民俗例であるが柱状木製品の用途を考える上での参考資料として提示しておきたい。

以上柱状木製品について若干の検討を加えたが、管見による限り列島内では酷似する木製品は確認されなかった。しかし、柱状木製品の起源は既述したように縄文時代の集団祭祀に伴う彫刻柱や柱状木製品に求められる可能性があり、集落の出入り口や集落内外の特定の場所に立てられたものと考えられる。長原遺跡で出土した柱状木製品の用途については、今後も資料の発見を待って再考したい。

第Ⅳ章 調査のまとめ

今回の調査では、先述したようにNG09-1次の調査区から後期旧石器時代の可能性のあるサヌカイトフレイクや、縄文時代後期の土器片が出土したほか、NG09-1・2次調査区で検出した弥生時代前期および中期の溝は、今回の調査地の西方に位置する出戸自然堤防上に営まれた弥生時代前期以降の集落域と当地域の関係を明らかにするための注意すべき遺構といえる。また、NG09-3次調査区で飛鳥時代のNR701から出土した頭部にヒトの鼻や口を表現したものとみられる柱状木製品、NG09-2次調査区では室町時代の溝(濠)で区画された屋敷地が検出された。これらの遺物や遺構は六反地域では初出といえ、当地域の歴史的な変遷を明らかにするうえで注目すべき資料となった。以下に調査成果を列記して調査のまとめとしたい。

弥生時代前期以降

本調査ではNG09-1・2次調査区で弥生時代前期以降の溝や小穴を検出したが、これらの遺構は当地域の西方に位置する出戸自然堤防上に営まれた弥生時代中期後葉の集落域と当地域の関係を明らかにするための資料となった。溝は形態や規模などから近隣に位置する水田と関わりのある用排水路の可能性もあるが、数点の土器片や細部調整が施された剥片が確認されたことから近隣に集落が存在する可能性がある。

古墳時代前期

各調査区で古墳時代前期の水田の作土層を確認した。中でもNG09-1次調査区では古墳時代前期の水田跡内で検出されたSX701から依存状況は悪かったが、槽・杭・板状の木製品が出土した。これらの木製品は水田跡の近くに集落が位置することを示唆している。

飛鳥時代

各調査区で当該期の水田の作土層を確認したほか、NG09-3次調査区では流路を確認した。NR701の第10a層から出土した柱状木製品はほぼ旧状を留めるものであり、本遺跡のみならず府下で初出となった。柱状木製品の用途については断定しがたいものの、豊中遺跡出土の古墳時代中期の木偶と同様に何らかの祭祀に伴って地面に立てられたのではないかと、また、柱状木製品の形態は朝鮮半島の李氏朝鮮時代に集落の出入り口に立てられたチャンスンと呼ばれる男女一対の木剛に類似しているように思われた。今後も資料の収集と検討を加えたい。

室町時代

NG09-2・3次調査区で検出した幅4m前後のSD301・329は15世紀代の瓦質土器を伴う屋敷地を区画する濠と推定された。溝の南側では井戸や土壇、柱穴など集落に伴う遺構が検出されたことから、調査地域が室町時代の集落の一面に当たることが明らかになった。室町時代の集落の存在が考古学的に裏付けられたのは今回の調査が最初となった。

江戸時代

17世紀初頭の肥前陶器小皿9点を中国産青花皿で蓋をし、土壙に埋納したSK206は長原遺跡で初出となった。小皿は口縁部や高台に打欠きがあるほか、底部には墨書で○が描かれていたことから、埋納壙は何らかの宗教行為に伴う可能性がある。当地域の江戸時代初頭の信仰や宗教行為の実態を考えるうえで重要な資料となった。

表8 遺構観察表

調査次数	遺構名	層位	規模(m)				主要埋土	時期
			長辺	短辺(延)	直径	深さ		
NG09-1	SD801	第8層上面	-	0.10以上	-	0.10	オリブ黒色細粒砂混り粘土質シルト	弥生時代中期
NG09-1	SD802	第8層上面	2.40	0.60以上	-	0.70	灰色細粒砂質シルト	弥生時代中期
NG09-1	SD803	第7層上面	2.70	1.90	-	0.10	灰色粘土質シルト	古墳時代前期
NG09-2	NR101	第10層上面	-	1.20以上	-	1.00	灰色細粒砂質シルト	弥生時代前期後葉
NG09-2	SD100	第10層上面	-	0.70以上	-	0.20以上	黒色シルト	弥生時代前期後葉
NG09-2	SD113	第11層上面	-	0.90	-	0.25	暗オリブ灰色粘土質シルト塊礫含む 暗オリブ灰色シルト質細粒砂	弥生時代前期後葉
NG09-2	SD329	第3層上面	-	4.50以上	-	0.30	灰色細粒砂混り粘土質シルト	室町時代
NG09-2	SD340	第3層上面	-	2.50	-	0.17	灰色細粒砂混り粘土質シルト	室町時代
NG09-2	SD346	第3層上面	-	0.40	-	0.14	オリブ褐色シルト質細粒砂	室町時代
NG09-2	SE338	第3層上面	1.60	1.30	-	1.30	オリブ灰色シルト質細粒砂	室町時代
NG09-2	SE344	第3層上面	-	-	1.10以上	2.20	暗オリブ灰色シルト～細粒砂	室町時代
NG09-2	SE353	第3層上面	2.70	1.30以上	-	2.30	暗オリブ灰色粘土質シルト	室町時代
NG09-2	SK114	第11層上面	-	-	0.90	0.05	オリブ黒色細粒砂質シルト	弥生時代前期後葉
NG09-2	SK206	第2層内	5.20	0.70以上	-	0.20	暗灰色細粒砂混り粘土質シルト	江戸時代初期
NG09-2	SK247	第2層内	0.90以上	1.00	-	0.20	灰色細粒～中粒砂含むシルト	江戸時代初期
NG09-2	SK248	第2層内	1.10	0.90	-	0.36	暗オリブ灰色シルト質細粒砂	江戸時代初期
NG09-2	SK249	第2層内	1.20	0.70以上	-	0.26	暗オリブ灰色中粒砂混り粘土質シルト	江戸時代初期
NG09-2	SK250	第2層内	1.10	0.90以上	-	0.13	オリブ褐色細粒砂質シルト	江戸時代初期
NG09-2	SK251	第2層内	1.00	1.00以上	-	0.14	灰色細粒～中粒砂質シルト	江戸時代初期
NG09-2	SK252	第2層内	2.00以上	0.70以上	-	0.07	灰色細粒砂質シルト	江戸時代初期
NG09-2	SK301	第3層上面	-	-	0.75	0.25	暗灰色細粒～中粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SK302	第3層上面	1.10	1.00	-	0.10	暗灰色細粒～中粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SK307	第3層上面	1.00	0.70	-	0.40	暗灰色シルト質細粒～細粒砂	室町時代
NG09-2	SK308	第3層上面	1.60	0.70	-	0.35	灰色細粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SK310	第3層上面	1.70	1.20以上	-	0.20	灰色細粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SK311	第3層上面	2.50	1.00	-	0.10	灰色細粒砂質シルト～細粒砂	室町時代
NG09-2	SK325	第3層上面	0.90	0.80	-	0.12	灰色細粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SK336	第3層上面	1.10	0.90	-	0.14	灰色細粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SK327	第3層上面	-	-	1.50	0.20	灰色細粒～細粒砂混り粘土質シルト	室町時代
NG09-2	SK330	第3層上面	1.40	0.50	-	0.10	にぶい黄褐色細粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SK332	第3層上面	0.25	0.20	-	0.10	褐色小礫混り粘土～細粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SK333	第3層上面	1.75以上	1.60	-	0.25	オリブ褐色細粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SK334	第3層上面	2.30	1.00以上	-	0.30	オリブ褐色細粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SK341	第3層上面	2.30	0.60以上	-	0.25	オリブ褐色シルト質細粒砂	室町時代
NG09-2	SK343	第3層上面	2.50	1.50	-	0.40	暗オリブ灰色シルト塊礫混り細粒～中粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SK364	第3層上面	0.80	0.70	-	0.08	暗オリブ灰色細粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SP111	第11層上面	-	-	0.30	0.15	暗オリブ灰色細粒砂混り粘土質シルト	弥生時代前期後葉
NG09-2	SP112	第11層上面	-	-	0.20	0.10	オリブ黒色細粒砂混り粘土質シルト	弥生時代前期後葉
NG09-2	SP113	第3層上面	-	-	0.35	0.30	灰色シルト質細粒砂	室町時代
NG09-2	SP114	第3層上面	-	-	0.30	0.30	暗灰色シルト質中粒～細粒砂	室町時代
NG09-2	SP115	第3層上面	-	-	0.45	0.40	暗灰色シルト質細粒～細粒砂	室町時代
NG09-2	SP116	第3層上面	-	-	0.25	0.15	灰オリブ色細粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SP118	第3層上面	-	-	0.30	0.40	にぶい黄褐色細粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SP119	第3層上面	-	-	0.35	0.30	暗灰色シルト質中粒砂	室町時代
NG09-2	SP120	第3層上面	-	-	0.25	0.25	オリブ褐色細粒～細粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SP121	第3層上面	-	-	0.30	0.30以上	オリブ褐色細粒～細粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SP122	第3層上面	-	-	0.25	0.30	オリブ褐色シルト質中粒～細粒砂	室町時代
NG09-2	SP123	第3層上面	-	-	0.25	0.25	オリブ褐色シルト質中粒～細粒砂	室町時代
NG09-2	SP124	第3層上面	-	-	0.23	0.30	暗灰色シルト質中粒～細粒砂	室町時代
NG09-2	SP125	第3層上面	-	-	0.20	0.30	オリブ褐色シルト質中粒～細粒砂質シルト	室町時代
NG09-2	SP145	第3層上面	-	-	0.22	0.30	にぶい黄褐色細粒砂	室町時代
NG09-2	SK312	第3層上面	2.00以上	2.00以上	-	0.40	暗灰色細粒砂質シルト	室町時代
NG09-3	NR701	第10層上面	-	-	-	-	緑黒色細粒砂質シルト	縄文時代
NG09-3	SD301	第2層上面	-	-	0.70	0.80	黄灰色中粒砂混り細粒砂質シルト	江戸時代後～末期
NG09-3	SD212	第2層上面	-	-	0.40	0.08	黄灰色中粒砂混り細粒砂質シルト	江戸時代後～末期
NG09-3	SD303	第3層上面	-	-	4.20	1.00	暗オリブ灰色細粒砂混り細粒砂質シルト	室町時代
NG09-3	SE205	第2層上面	-	-	0.60	1.00	灰色細粒砂質シルト	江戸時代後～末期
NG09-3	SE207	第2層上面	-	-	2.00	1.00以上	オリブ黒色細粒砂質シルト	江戸時代後～末期
NG09-3	SK202	第2層上面	2.70以上	1.20	-	0.40	灰黄色シルト	江戸時代後～末期
NG09-3	SK204	第2層上面	-	-	2.00	1.00	黄灰色シルト質細粒砂	江戸時代後～末期
NG09-3	SK208	第2層上面	1.50以上	0.50	-	0.15	灰色細粒～中粒砂混り塊礫含む細粒砂質シルト	江戸時代後～末期
NG09-3	SK209	第2層上面	1.70以上	0.60	-	0.20	オリブ褐色細粒～細粒砂混り粘土質シルト	江戸時代後～末期
NG09-3	肥後203	第2層上面	-	-	1.00	1.00	灰色シルト質細粒砂	江戸時代後～末期
NG09-3	肥後206	第2層上面	-	-	0.80	1.00	暗灰色細粒砂質シルト	江戸時代後～末期

表9 遺物観察表(1)

調査次数	発掘 番号	部種	形状	遺物名	層位	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	備考
NG99-1	1	弥生土器	甕	SD801	-	14.0	(1.0)	灰黄色・黒褐色	長石・雲母	良好	小・弥生時代中期後半
NG99-1	2	石器	刮削(未成品)	SD801	-	最大径3.0	最大幅1.7	-	-	-	-
NG99-1	3	木製品	板状	SD701	-	最大径44.6	最大幅25.9	-	-	-	古銅時代前期
NG99-1	4	木製品	棒	SD703	-	最大径28.3	最大幅15.9	-	-	-	古銅時代前期
NG99-1	5	木製品	板	SD701	-	34.9	(5.9)	-	-	-	古銅時代前期
NG99-1	6	木製品	板	SD701	-	59.2	(6.5)	-	-	-	古銅時代前期
NG99-1	7	木製品	板	SD701	-	68.4	(4.2)	-	-	-	古銅時代前期
NG99-1	8	土器	7の口径調整	-	第4層	9.5	(1.6)	にぶい黄褐色	長石・石英・雲母	良好	1.1 横部1/4 11cft
NG99-1	9	弥生土器	横丸	-	第4層	-	(1.6)	灰黄色・黒褐色	砂鉄・雲母・黒色粒	良好	表部1/4 10c中重
NG99-1	10	土器	杯状	-	第4層	15.7	(2.1)	にぶい黄・オレンジ黄色	砂鉄・チャート・雲母	良好	小・奈良時代中重
NG99-1	11	弥生土器	甕	-	第7a層	19.9	(6.4)	灰色	長石・石英・雲母	良好	小・15c前期
NG99-1	12	土器	棒	-	第4層	23.8	(4.7)	灰黄・灰黄色	砂鉄・雲母・赤色粒	良好	1.1 横部1/8 奈良時代
NG99-1	13	縄文土器	一	-	第9c層	-	(2.4)	灰・灰オレンジ色	長石・角閃石	良好	小・縄文時代後期
NG99-1	14	縄文土器	器	-	第9c層	-	(1.7)	にぶい黄色	長石・石英・雲母	良好	新部1/3 縄文時代後期
NG99-1	15	土器	鈴	-	第2a層	2.5	2.2	浅黄褐色	長石	良好	1.1 時代後重
NG99-1	16	弥生土器	甕	-	第7a層	-	(2.7)	にぶい黄・黄灰色	長石・石英・雲母	良好	小・15c前期
NG99-1	17	弥生土器	甕	-	第7a層	-	(3.6)	暗灰黄・黄褐色	長石・石英・雲母	良好	小・15c前期
NG99-1	18	石器	凹型石片	-	第9c層	最大径2.7	最大幅0.2	-	-	-	縄文時代後期以前
NG99-1	19	石器	刮削	-	第11b層	最大径2.5	最大幅0.9	-	-	-	ササキイ 後期旧石器時代・縄文時代前期
NG99-1	20	土器	へちま	SD808	-	7.9	1.6	にぶい黄褐色	砂鉄・雲母	良好	1.1 横部1/4 15c前・中重
NG99-1	21	土器	へちま	SD808	-	7.6	1.7	灰白色	長石・雲母・赤色粒	良好	完形 15c前・中重
NG99-1	22	土器	へちま	SD808	-	7.9	1.2	にぶい褐色	長石・赤色粒	良好	小・15c前・中重
NG99-1	23	土器	へちま	SD823	-	8.6	0.29	浅黄褐色	焼土	良好	1.1 横部1/5 15c前・中重
NG99-1	24	土器	へちま	SD808	-	8.6	(1.3)	にぶい黄・にぶい褐色	長石・雲母・赤色粒	良好	小・15c前・中重
NG99-1	25	瓦質土器	羽釜	SD808	-	20.1	(4.4)	灰色	砂鉄・雲母・酸化鉄粒	良好	1.1 横部1/6 15c前
NG99-1	26	瓦質土器	羽釜	SD843	-	22.6	(5.3)	灰色	長石・雲母	良好	小・15c
NG99-1	27	瓦質土器	羽釜	SD843	-	24.6	(4.8)	暗灰・暗灰色	砂鉄・雲母	良好	小・15c
NG99-1	28	瓦質土器	羽釜	SD843	-	26.4	(5.3)	灰色	砂鉄・雲母	良好	1.1 横部1/6 15c
NG99-1	29	瓦質土器	羽釜	SD808	-	31.0	(9.9)	灰・灰白色	長石・チャート・雲母	良好	1.1 横部1/3 15c前・中重
NG99-1	30	瓦質土器	羽釜	SD827	-	-	(6.1)	灰・灰白色	砂鉄・雲母・酸化鉄粒	良好	小・15c
NG99-1	31	瓦質土器	縁鉢	SD843	-	24.4	(6.1)	灰色	砂鉄・雲母	良好	小・15c
NG99-1	32	瓦質土器	縁鉢	SD843	-	27.1	(4.5)	暗灰色	長石・チャート	良好	1.1 横部1/7 15c
NG99-1	33	瓦質土器	縁鉢	SD823	-	29.8	(4.7)	灰色	砂鉄	良好	小・15c
NG99-1	34	瓦質土器	縁鉢	SD843	-	31.4	(5.8)	にぶい褐色	砂鉄・雲母	良好	1.1 横部1/7
NG99-1	35	瓦質土器	縁鉢	SD824	-	-	(6.0)	灰・灰白色	長石・雲母・酸化鉄粒	良好	横部1/2
NG99-1	36	横切陶器	壺	SD820	-	21.1	(4.3)	灰色	砂鉄	良好	1.1 横部1/3 15c前・中重
NG99-1	37	横切陶器	壺	SD823	-	9.6	(2.3)	オレンジ黄・灰白色	砂鉄	良好	1.1 横部1/5 15c前・中重
NG99-1	38	瓦質土器	羽釜	SD811	-	26.2	(8.6)	黄褐色・にぶい黄褐色	長石・石英・赤色粒	良好	小・15c
NG99-1	39	瓦質土器	甕	SD843	-	39.0	(5.6)	暗灰色	長石	良好	1.1 横部1/8 15c
NG99-1	40	瓦	平瓦	SD843	-	最大径68.7	最大幅102.0	暗灰・灰色	長石・酸化鉄粒	良好	小・15c
NG99-1	41	瓦	平瓦	SD841	-	最大径69.0	最大幅103.7	灰・灰白色	長石・雲母・酸化鉄粒	良好	1.8
NG99-1	42	瓦質土器	片戸棚	SE344	-	53.9	36.3	灰色	長石・石英・雲母・酸化鉄粒	良好	1/2 15c
NG99-2	43	瓦質土器	片戸棚	SE344	-	52.2	56.0	灰色	長石・石英・雲母・酸化鉄粒	良好	完形 15c
NG99-2	44	土器	小皿	SE344	-	10.0	(3.9)	灰黄色	砂鉄・雲母	良好	小・15c前・中重
NG99-2	45	瓦質土器	羽釜	SE344	-	16.6	(11.5)	暗灰色	砂鉄・雲母・酸化鉄粒	良好	1/3 15c前・中重
NG99-2	46	瓦質土器	羽釜	SE344	-	22.8	(5.5)	暗灰・灰色	長石・チャート・雲母	良好	小・15c前・中重
NG99-2	47	瓦質土器	羽釜	SE344	-	24.0	(9.7)	灰白色	砂鉄・雲母・酸化鉄粒	良好	1.1 横部1/8 15c前・中重
NG99-2	48	瓦質土器	甕	SE344	-	23.4	(6.3)	暗灰・灰白色	長石・石英・雲母・酸化鉄粒	良好	1.1 横部1/6 15c前・中重
NG99-2	49	瓦質土器	縁鉢	SE344	-	29.4	(8.2)	灰色	長石・石英・酸化鉄粒	良好	小・15c前・中重
NG99-2	50	瓦質土器	縁鉢	SE344	-	31.8	(6.6)	灰色	長石・チャート・雲母	良好	小・15c前・中重
NG99-2	51	土器	へちま	SE353	-	8.2	(1.6)	黄灰・灰黄色	砂鉄・赤色粒	良好	1.1 横部2/3
NG99-2	52	瓦質土器	縁鉢	SE353	-	-	(5.2)	黄灰色	長石・雲母	良好	小・15c前・中重
NG99-2	53	瓦質土器	縁鉢	SE353	-	24.0	(6.9)	暗灰・灰色	長石・雲母	良好	1.1 横部1/8 15c前・中重
NG99-2	54	瓦質土器	羽釜	SE353	-	28.4	(10.0)	暗灰色	長石・雲母	良好	1.1 横部1/8 15c前・中重
NG99-2	55	瓦質土器	甕	SE353	-	31.8	(5.7)	灰・灰白色	長石・石英・雲母・黒色粒	良好	1.1 横部1/8 15c前・中重
NG99-2	56	瓦質土器	甕	SE353	-	34.8	(13.9)	灰色	長石・雲母	良好	小・15c前・中重
NG99-2	57	瓦質土器	片戸棚	SE353	-	基部径52.0	(20.9)	灰色	長石・石英・酸化鉄粒	良好	横部1/3 15c前・中重
NG99-2	58	瓦	平瓦	SE353	-	最大径22.6	最大幅27.2	灰色	長石・酸化鉄粒	良好	2.3
NG99-2	59	木製品	両口具	SE353	-	最大径25.3	5.9	-	-	-	-
NG99-2	60	木製品	板	SE353	-	-	5.9	-	-	-	-
NG99-2	61	木製品	板	SE353	-	最大径13.4	最大幅15.0	-	-	-	加敷板用
NG99-2	62	木製品	板	SE353	-	最大径58.3	最大幅15.1	-	-	-	-
NG99-2	63	木製品	板	SE353	-	最大径55.9	最大幅16.2	-	-	-	-
NG99-2	64	木製品	板	SE353	-	最大径49.3	最大幅15.2	-	-	-	-
NG99-2	65	木製品	板	SE353	-	最大径41.6	最大幅8.6	暗赤褐色	-	-	柱の敷板用
NG99-2	66	瓦質土器	片戸棚	SD829	-	52.8	(9.1)	灰色	長石・雲母・酸化鉄粒	良好	小・15c
NG99-2	67	横切陶器	壺	SD829	-	-	(6.1)	灰色	長石・酸化鉄粒	良好	小・15c
NG99-2	68	石	重	SD829	-	10.8	3.3	(1.0)	砂鉄	良好	横部1/4 明部板用
NG99-2	69	横切陶器	縁鉢	SD829	-	22.5	(4.7)	暗赤灰・赤灰色	長石・雲母・酸化鉄粒	良好	小・15c 横切板用
NG99-2	70	横切陶器	縁鉢	SD829	-	26.8	(6.0)	暗赤灰・灰色	砂鉄	良好	小・15c
NG99-2	71	横切陶器	縁鉢	SD829	-	-	(4.2)	灰色	長石・赤色粒	良好	小・15c
NG99-2	72	土器	羽釜	SD829	-	23.2	(5.2)	にぶい黄褐色	砂鉄	良好	1.8 16c前重
NG99-2	73	土器	羽釜	SD829	-	24.6	(7.3)	にぶい黄褐色	長石・雲母・赤色粒	良好	小・16c前重
NG99-2	74	土器	土器	SD829	-	-	(7.6)	にぶい黄・黄・暗灰色	砂鉄・雲母	良好	1.6 16c前重

表10 遺物観察表(2)

調査年度	調査番号	部材	形状	遺物名	単位	寸法(cm)	部高(cm)	色調	胎土	焼成	備考
NG09-2	75	瓦瓦土器	羽釜	SR029	-	21.7	6.0	灰色	長石・雲母・酸化鉄粒	良好	口縁部1/7 15代
NG09-2	76	瓦瓦土器	羽釜	SR029	-	26.0	6.5	灰色	長石・赤色粒・酸化鉄粒	良好	小片 16代前葉
NG09-2	77	瓦瓦土器	羽釜	SR029	-	27.3	6.6	灰色	長石・石黄・チャート・雲母	良好	1/4
NG09-2	78	瓦瓦土器	様鉢	SR029	-	20.2	6.5	灰色・灰白色	砂粒・雲母	良好	小片 16代前葉
NG09-2	79	瓦瓦土器	様鉢	SR029	-	27.3	6.5	灰色	長石・雲母・酸化鉄粒	良好	1.1層部1/5 16代前葉
NG09-2	80	瓦瓦土器	様鉢	SR029	-	-	(4.1)	灰・灰白色	長石・チャート	良好	底部1/2
NG09-2	81	瓦瓦土器	様鉢	SR029	-	-	(3.6)	灰色	長石・チャート	良好	底部1/2
NG09-2	82	瓦瓦土器	壺	SR029	-	24.9	7.3	灰色	長石・石黄・雲母・酸化鉄粒	良好	小片 16代前葉
NG09-2	83	瓦瓦土器	壺	SR029	-	30.0	6.5	灰色	長石・酸化鉄粒	良好	小片 16代前葉
NG09-2	84	瓦瓦土器	鉢	SR029	-	37.2	7.6	灰色	長石・雲母	良好	小片 16代前葉
NG09-2	85	瓦	軒平瓦	SR029	-	-	最大幅9.4	灰色	長石・雲母・酸化鉄粒	良好	1/3 古墳時代後葉
NG09-2	86	瓦	丸瓦	SR029	-	最大長9.0	最大幅8.8	にぶい黄褐色・灰黄色	長石・石黄・チャート・赤色粒	良好	小片 古墳時代後葉
NG09-2	87	瓦	丸瓦	SR029	-	最大長10.6	最大幅10.0	暗灰色	長石・石黄・雲母・酸化鉄粒	良好	1/8 古墳時代後葉
NG09-2	88	瓦	平瓦	SR029	-	最大長14.8	最大幅12.7	にぶい黄・灰色	長石・石黄・雲母・赤色粒	良好	1/4 古墳時代後葉
NG09-2	89	石製品	碇石	SR029	-	最大長16.0	最大幅4.3	-	-	-	碇石片
NG09-2	90	石製品	碇石上石	SR029	-	直径30.0	最大厚5.2	-	-	-	碇石片
NG09-2	91	瓦瓦土器	壺	SR032	-	24.0	7.0	灰白・灰色	砂粒・雲母・酸化鉄粒	良好	口縁部2/3 16代前・中葉
NG09-2	92	甕形陶器	小皿	SR206	-	11.5	3.0	オリーブ黄・にぶい褐色	砂粒	良好	底部遺物(○) 17代前葉
NG09-2	93	甕形陶器	小皿	SR206	-	10.7	2.6	灰オリーブ・にぶい褐色	砂粒	良好	底部遺物(○) 17代前葉
NG09-2	94	甕形陶器	小皿	SR206	-	10.7	3.0	オリーブ黄・にぶい褐色	砂粒	良好	底部遺物(○) 17代前葉
NG09-2	95	甕形陶器	小皿	SR206	-	11.2	2.8	オリーブ黄・にぶい褐色	砂粒	良好	底部遺物(○) 17代前葉
NG09-2	96	甕形陶器	小皿	SR206	-	11.1	3.0	灰オリーブ・にぶい褐色	砂粒	良好	底部遺物(○) 17代前葉
NG09-2	97	甕形陶器	小皿	SR206	-	11.1	3.2	灰オリーブ・にぶい褐色	砂粒	良好	底部遺物(○) 17代前葉
NG09-2	98	甕形陶器	小皿	SR206	-	11.4	3.2	オリーブ黄・にぶい褐色	砂粒	良好	底部遺物(○) 17代前葉
NG09-2	99	甕形陶器	小皿	SR206	-	11.2	3.0	灰オリーブ・明褐色	砂粒	良好	底部遺物(○) 17代前葉
NG09-2	100	甕形陶器	小皿	SR206	-	11.0	2.8	灰オリーブ・にぶい褐色	砂粒	良好	底部遺物(○) 17代前葉
NG09-2	101	中環帯土器	壺	SR206	-	20.4	4.0	青灰色	砂粒	良好	底部遺物(○) 17代前葉
NG09-2	102	瓦瓦土器	羽釜	-	第4層	22.0	7.0	灰・灰白色	砂粒・雲母	良好	口縁部1/5 16代前葉
NG09-2	103	瓦瓦土器	羽釜	-	第4層	28.6	6.8	暗灰色	長石・雲母・酸化鉄粒	良好	小片 15代中・後葉
NG09-2	104	土師器	鉢	-	第4層	32.2	6.6	にぶい黄褐色・灰色	砂粒・雲母	良好	小片 16代前葉
NG09-2	105	瓦瓦土器	様鉢	-	第4層	31.6	6.6	灰・灰白色	砂粒	やや良	口縁部1/10 15代中・後葉
NG09-2	106	瓦瓦土器	様鉢	-	第4層	35.4	6.6	暗灰色・黄灰色	長石・石黄・雲母・赤色粒	良好	口縁部1/10 15代中・後葉
NG09-2	107	瓦瓦土器	様鉢	-	第4層	-	(4.4)	灰白・灰黄褐色	砂粒・雲母	良好	底部1/4 15代中・後葉
NG09-2	108	瓦瓦土器	壺	-	第4層	34.6	7.3	灰色	長石・雲母・酸化鉄粒	良好	口縁部1/7 15代中・後葉
NG09-2	109	瓦瓦土器	火鉢	-	第4層	43.8	6.7	灰色	砂粒・雲母・酸化鉄粒	良好	口縁部1/10 15代前葉
NG09-2	110	甕土土器	壺	-	第4層	-	(2.6)	にぶい黄褐色	長石・石黄・チャート・雲母・陶粒・赤色粒	良好	古墳時代後葉末・中葉前葉
NG09-2	111	土師器	高杯	-	第7層	19.2	7.0	にぶい黄褐色	砂粒・雲母	良好	1/3 古墳時代後葉末・中葉前葉
NG09-2	112	土師器	杯A	-	第7層	11.3	3.6	にぶい黄褐色	砂粒・雲母・赤色粒	良好	3/4 7代前葉
NG09-2	113	土師器	杯B	-	第7層	14.7	4.0	灰白色	砂粒・雲母	良好	小片 7代前葉
NG09-2	114	土師器	壺	-	第7層	16.6	(14.9)	にぶい黄褐色・にぶい黄褐色	長石・石黄・雲母	良好	1/3 7代前葉
NG09-2	115	土師器	付託	SR071	-	最大長25.0	最大幅10.4	灰色	砂粒・雲母	良好	2代 後葉時代
NG09-2	116	甕形陶器	付託網	SR202	-	10.0	3.0	灰白色	精良	良好	小片 18代前・中葉
NG09-2	117	甕形陶器	付託網	SR202	-	10.8	4.1	灰白色	精良	良好	1/3 18代前・中葉
NG09-2	118	甕形陶器	付託網	SR202	-	11.4	5.1	灰白色	精良	良好	1/2 18代前・中葉
NG09-2	119	甕形陶器	付託網	SR202	-	10.0	5.5	灰白色	精良	良好	2/3 18代前・中葉
NG09-2	120	甕形陶器	付託網	SR204	-	10.4	7.9	灰白色	精良	良好	2/3 18代前・中葉
NG09-2	121	ニベ・ア土器	土鍋	SR202	-	4.4	2.2	灰色	精良	良好	底部遺物(○) 17代前葉
NG09-2	122	土師器	付託	SR204	-	27.8	5.0	灰黄・黄褐色	長石・雲母・赤色粒	良好	小片 18代前・中葉
NG09-2	123	付託焼	様鉢	SR204	-	32.4	7.0	にぶい黄褐色・にぶい黄褐色	長石・石黄	良好	小片 18代前・中葉
NG09-2	124	甕形陶器	付託網	SR200	-	11.4	5.0	灰白色	精良	良好	1/2 18代前・中葉
NG09-2	125	甕形陶器	付託網	SR205	-	11.2	6.6	灰白色	精良	良好	1/3 18代前・中葉
NG09-2	126	甕形陶器	付託網	SR205	-	11.2	(4.5)	灰白色	精良	良好	1/3 18代前・中葉
NG09-2	127	甕形陶器	付託網	SR205	-	11.0	5.6	灰白色	精良	良好	1/3 18代前・中葉
NG09-2	128	甕形陶器	付託網	SR205	-	11.0	5.1	灰白色	精良	良好	2/3 18代前・中葉
NG09-2	129	甕形陶器	付託網	SR207	-	10.2	6.0	灰白色	精良	良好	小片 18代前・中葉
NG09-2	130	甕形陶器	付託網	SR206	-	10.4	5.0	灰白色	精良	良好	1/2 18代前・中葉
NG09-2	131	甕形陶器	付託網	SR207	-	13.4	(4.6)	灰白色	精良	良好	小片 18代前・中葉
NG09-2	132	甕形陶器	付託網	SR207	-	9.2	6.9	灰色	精良	良好	1/2 18代前・中葉
NG09-2	133	甕形陶器	付託網	SR203	-	9.8	3.2	灰色	精良	良好	1/3 18代前・中葉
NG09-2	134	甕形陶器	付託網	SR203	-	10	7.7	灰白色	精良	良好	1/2 18代前・中葉
NG09-2	135	甕形陶器	赤銅油塗	SR205	-	9.9	6.9	灰黄・にぶい黄褐色	精良	良好	2/3 18代前・中葉
NG09-2	136	甕形陶器	網	SR205	-	10.6	5.2	黄褐色	精良	良好	2/3 18代前・中葉
NG09-2	137	甕形陶器	網	SR205	-	12.8	7.3	灰黄・灰白色	精良	良好	1/3 18代前・中葉
NG09-2	138	甕形陶器	網	SR206	-	11.4	1.8	灰黄色	精良	良好	2/3 18代前・中葉
NG09-2	139	甕形陶器	鉢	SR207	-	-	(2.3)	灰白・灰黄色	良	良好	底部1/2 18代前・中葉
NG09-2	140	甕形陶器	様鉢	SR200	-	28.6	6.6	赤褐色	長石・石黄・チャート	良好	小片 18代前・19代前葉
NG09-2	141	土師器	付託	SR205	-	22.0	7.0	黄褐色	良	良好	小片 18代前・19代前葉
NG09-2	142	土師器	付託	SR205	-	28.8	6.4	にぶい黄褐色・黄褐色	長石・石黄・雲母・赤色粒	良好	小片 18代前・中葉
NG09-2	143	土師器	付託	SR205	-	31.0	(3.9)	黄褐色・にぶい黄褐色	長石・雲母・赤色粒	良好	小片 18代前・中葉
NG09-2	144	土師器	付託	SR205	-	34.2	6.0	黄・にぶい黄褐色	長石・石黄・赤色粒	良好	小片 18代前・中葉
NG09-2	145	土師器	付託	SR207	-	34.7	(5.8)	灰色	長石・石黄	良好	小片
NG09-2	146	土師器	遺品瓦	SR206	-	直径18.0	瓦高1.1	灰色	精良	良好	小片、瓦高のみ

表11 遺物観察表(3)

調査年度	掲載品目	品名	遺物名	単位	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	備考
N209-3-147	瓦	亀瓦	SE205	-	最大長99	最大幅120	暗灰色	長石・石末	良好	小片 京町時代
N209-3-148	金属製品	棒	SE206	-	最大長120	最大幅14	-	-	-	片断製、完形
N209-3-149	金属製品	棒	SE207	-	最大長163	最大幅27	-	-	-	2/3
N209-3-150	瓦	家永通書	SE203	-	直径54	最大厚0.15	-	-	-	完形
N209-3-151	石製品	砥石	SE207	-	最大長10.99	最大幅5.25	-	-	良好	砂研
N209-3-152	瓦	分銅状	SE206	-	-	最大幅7.2	-	-	良好	破片、完形
N209-3-153	瓦	井戸瓦	SE207	-	最大長270	最大幅25.4	灰〜灰褐色	横直	良好	完形
N209-3-154	肥前組	染付碗	SE001	-	105	47	灰白色	横直	良好	小片 18c中〜後葉
N209-3-155	肥前組	染付碗	SE001	-	101	56	灰白色	横直	良好	1/2 18c中〜後葉
N209-3-156	肥前組	染付碗	SE001	-	106	54	灰白色	横直	良好	1/3 18c中〜後葉
N209-3-157	肥前組	染付碗	SE001	-	110	53	灰白〜灰白・青褐色	横直	良好	2/3 18c中〜後葉
N209-3-158	肥前組	染付碗	SE001	-	-	(12.7)	暗褐色〜灰白・褐色	横直	良好	1/2 18c中〜後葉
N209-3-159	木製品	漆碗	SE001	-	105	(5.5)	赤黒〜赤色	-	-	小片 18c中〜後葉
N209-3-160	土師器	地物	SE001	-	288	(48)	茶褐色〜灰白・黄褐色	横直	良好	小片 18c中〜後葉
N209-3-161	土師器	地物	SE001	-	340	(7.7)	赤黒〜灰白・黄褐色	長石・石末・赤色粒	良好	1/5 18c中〜後葉
N209-3-162	片流焼	漆鉢	SE001	-	394	(38)	灰白・黄褐色	長石・石末	良好	小片 18c中〜後葉
N209-3-163	瓦	家永通書	SE001	-	直径24	最大厚0.15	-	-	-	完形 18c中〜後葉
N209-3-164	肥前組	染付小皿	-	第2層	88	45	暗褐色	横直	良好	小片 19c前半以降
N209-3-165	肥前組	染付碗	-	第2層	108	53	暗褐色	横直	良好	1/2 19c前半以降
N209-3-166	肥前組	染付碗	-	第2層	114	56	暗褐色	横直	良好	完形 19c前半以降
N209-3-167	肥前組	染付碗	-	第2層	100	55	灰白色	横直	良好	1/3 19c前半以降
N209-3-168	肥前組	染付碗	-	第2層	98	57	暗褐色	横直	良好	1/2 19c前半以降
N209-3-169	肥前組	染付碗	-	第2層	101	71	暗褐色	横直	良好	2/3 19c前半以降
N209-3-170	肥前組	染付碗	-	第2層	108	(5.7)	暗褐色	横直	良好	1/3 19c前半以降
N209-3-171	肥前組	染付碗	-	第2層	133	62	暗褐色	横直	良好	2/3 19c前半以降
N209-3-172	肥前組	染付碗	-	第2層	98	(5.0)	灰白色	横直	良好	1/3 19c前半以降
N209-3-173	肥前組	染付碗	-	第2層	104	66	暗褐色	横直	良好	2/3 19c前半以降
N209-3-174	肥前組	染付碗	-	第2層	100	76	灰白色	横直	良好	1/4 19c前半以降
N209-3-175	肥前組	皿	-	第2層	144	39	暗褐色	横直	良好	1/3 19c前半以降
N209-3-176	肥前組	染付碗	-	第2層	122	53	灰白色	横直	良好	1/2 19c前半以降
N209-3-177	肥前組	鉢	-	第2層	-	(14)	灰白色	横直	良好	表面の赤
N209-3-178	肥前組	小杯	-	第2層	63	44	灰黄色	横直	良好	完形 19c前半以降
N209-3-179	肥前組	三島手鉢	-	第2層	216	(19.8)	灰白・赤褐色〜灰褐色	横直	良好	1/3 19c前半以降
N209-3-180	土師器	地物	-	第2層	284	(5.9)	茶褐色〜灰白・褐色	横直	良好	小片
N209-3-181	土師器	地物	-	第2層	288	(14)	灰白・褐色〜灰白・黄褐色	長石・赤色粒	良好	小片
N209-3-182	土師器	地物	-	第2層	290	(8.1)	灰白色	長石・石末・赤・赤色粒	やや欠	小片
N209-3-183	片流焼	漆鉢	-	第2層	300	(10)	灰白〜灰褐色	長石・石末	良好	小片 19c前半以降
N209-3-184	片流焼	漆鉢	-	第2層	356	(9.2)	灰白・赤褐色〜灰褐色	長石・石末	良好	1/5 19c前半以降
N209-3-185	漆	漆鉢	-	第2層	330	120	赤〜灰白・赤褐色	長石・石末	良好	1/2
N209-3-186	片流焼	漆鉢	-	第2層	348	147	暗褐色〜灰褐色	長石・石末	良好	1/3 19c前半以降
N209-3-187	土師器	煎茶	-	第2層	140	40	茶〜灰白・黄褐色	長石・石末・黄緑	良好	小片
N209-3-188	土師器	煎茶	-	第2層	174	(14)	灰黄色	長石・赤色粒	良好	銘付 2
N209-3-189	瓦	産瓦	-	第2層	直径78	瓦厚14	灰色	横直	良好	小片、瓦のひ
N209-3-190	瓦	軒瓦	-	第2層	直径151	瓦厚22	灰色	横直	良好	瓦のひ、京町時代
N209-3-191	瓦	軒瓦	-	第2層	直径133	瓦厚19	灰色	横直	良好	瓦のひ、京町時代
N209-3-192	瓦	軒瓦	-	第2層	直径24	最大厚0.15	-	-	-	完形 1423年寺氏朝野世
N209-3-193	-	磚	SE205	-	最大長80	最大厚1.8	-	-	-	50年 京町時代

引用・参考文献

- 池上曾根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会1996、『弥生の環濠都市と巨大神殿－徹底討論池上曾根遺跡－』
- 岩手県埋蔵文化財センター1982、『盛岡市科内遺跡』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第32集
- 大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会1978、『Ⅳ 長吉六反(推定・城山古墳跡)試掘調査』、『平野遺跡群試掘調査報告書』、pp.12-16
- 大阪市文化財協会1978、『長原遺跡発掘調査報告』
- 1979a、『大阪市下水管渠工事に伴う平野区所在遺跡発掘調査(NG12次)報告書』
- 1979b、『大阪市下水道発進口建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG16次)報告書』
- 1979c、『関西電力管路埋設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG17)略報』
- 1980a、大阪市文化財協会2006年『第Ⅴ章 北地区の調査』:『長原遺跡発掘調査報告』XV、p.168
- 1980b、大阪市文化財協会2006年『第Ⅴ章 北地区の調査』:『長原遺跡発掘調査報告』XV、p.162
- 1981a、『大阪市下水管渠築造工事(押込口)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-1)略報』
- 1981b、『八尾～富田林局間同軸ケーブル方式工事(土木)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-2)略報』
- 1982、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 1983、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 1984a、『下水工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-1)略報』
- 1984b、『大阪市住宅供給公社長原六反用地ボーリング調査(NG83-5)略報』
- 1984c、『大阪市平野区長吉出戸における下水道工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-22)略報』
- 1984d、『長吉出戸六反地区幹線下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-43)略報』
- 1984e、『仲産薬店舗建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-54)略報』
- 1984f、『吉内邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-63)略報』
- 1984g、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-65)略報』
- 1985a、大阪市文化財協会2006年『第Ⅶ章 東・東北地区の調査』:『長原遺跡発掘調査報告』XV、pp.267-271
- 1985b、『長吉出戸地区下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-18)略報』
- 1985c、『地中送電線工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-49)略報』
- 1985d、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-86)略報』
- 1986、大阪市文化財協会2006年『第Ⅶ章 東・東北地区の調査』:『長原遺跡発掘調査報告』XV、p.261
- 1989、『(株)ビーバーハウスによる建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG88-6)略報』
- 1997、『平成8年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG96-79)略報』
- 1998a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅰ
- 1998b、『平成9年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG97-41)完了報告書』
- 1999、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ
- 2000a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ

- 2000b、『長原・瓜破跡発掘調査報告』XV
- 2001、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』IV
- 2002a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』V
- 2002b、『長原遺跡発掘調査報告』VII
- 2003、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』VI
- 2004a、『長原遺跡発掘調査報告』XI
- 2004b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』VII
- 2005、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』VIII
- 2006a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』IX
- 2006b、『長原遺跡発掘調査報告』XV
- 2007、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』X
- 2008a、『長原遺跡発掘調査報告』XVI
- 2008b、『長原遺跡発掘調査報告』XVII
- 2008c、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XI
- 2009a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XII
- 2009b、『長原遺跡発掘調査報告』XIII
- 2009c、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XIII
- 大阪文化財研究所2011a、『長原遺跡発掘調査報告』XIX
- 2011b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』XV
- 大阪文化財センター1980、『亀井・城山』
- 1986a、『城山(その1)』
- 1986b、『城山(その2)』
- 1986c、『城山(その3)』
- 小山正忠・竹原秀雄2006、『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社
- 尾上実1983,『「南河内の瓦器埴」: 古代を考える会編「藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢」藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会, pp.689-705
- 尾上実・森島康雄・近江俊秀1995,『瓦器埴』: 中世土器研究会編「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社, pp.315-327
- 川西宏幸1978,『円筒埴輪総論』: 『考古学雑誌』第64号第2巻 日本考古学会, pp.95-164
- 絹川一徳2000,『石器器種とその分類』: 大阪市文化財協会編「長原遺跡東部地区発掘調査報告」III, pp.150-189
- 九州近世陶磁学会2002,『国内出土の肥前陶磁』
- 建設省国土地理院1983,『土地条件調査報告書(大阪平野)』
- 古代の土器研究会1992,『古代の土器1 都城の土器集成』
- 小林達雄1986,『原始集落』: 『岩波講座日本考古学』4, pp.37-75
- 佐藤隆1992,『平安時代における長原遺跡の動向』: 大阪市文化財協会編「長原遺跡発掘調査報告」V, pp.102-114
- 1995,『大阪市内における中世集落の動向の一例-中国製磁器の出土傾向を中心に-』: 日本中世土器研究会「中世土器の基礎研究」XI, pp.45-54
- 滋賀県立埋蔵文化財センター1991,『弥生時代の木偶が出土-草津市烏丸崎遺跡-』: 『滋賀埋文ニュース』第125号
- 高橋工1999a,『長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期-飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態』: 大阪

- 市文化財協会編「長原遺跡東部地区発掘調査報告」Ⅱ、pp.79-106
- 1999b、「奈良時代以降の長原遺跡東北地区」：大阪市文化財協会編「長原遺跡東部地区発掘調査報告」Ⅱ、pp.123-127
- 高橋工・杉本厚典・大庭重信・絹川一徳2000、「長原遺跡東北地区の基本層序」：大阪市文化財協会編「長原遺跡東部地区発掘調査報告」Ⅲ、pp.10-11
- 田辺昭三1981、「須恵器大成」 角川書店
- 田中清美2011、「SE7105およびSE756出土土器群の編年的な位置付け」：大阪文化財研究所編「長原遺跡発掘調査報告」XIX、pp.74-77
- 趙哲済2003、「大阪平野のいたちと人類遺跡」：『日本第四紀学会「大阪100万年の自然と人のくらし」普及講演会資料集」、pp.1-16
- 2005、「河内平野の古地理変遷」：平野区誌編集委員会編「平野区誌」、p.24
- 2010、「土層の認識と表土・包含層の発掘」：文化庁文化財部記念物課編「発掘調査のてびき-集落遺跡発掘編-」、pp.93-116
- 中世土器研究会編1995、「概説中世の土器・陶磁器」
- 寺沢薫・森井貞雄1989、「1 河内地域」：『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ、pp.132-146
- 奈良国立文化財研究所1993、「木器集成図録近畿原始編(解説)」、pp.188-189
- 能都町教育委員会1986、「真脇遺跡」
- 橋本澄夫1990、「日本の古代遺跡・石川」43、pp.78-80
- 文化庁文化財部記念物課編2010、「第1節 遺跡における土層の認識」：『発掘調査のてびき-集落遺跡発掘編-』、pp.94-115
- 光谷拓実・大河内隆之2006、「歴史学の編年研究における年輪年代法の応用」中期計画(2001年～2005年)事業調査報告書、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所所蔵文化財センター古環境研究室
- 森川昌和・橋本澄夫1994、「日本の古代遺跡を掘る鳥浜貝塚」Ⅰ、pp.189-191
- 八尾市文化財調査研究会2000a、「Ⅴ 太子堂遺跡第7次調査(TS97-7)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.59-73
- 2000b、「Ⅵ 太子堂遺跡第7次調査(TS98-8)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.75-93

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- | | | | |
|---|---------------------------------|---|---|
| い | 石臼…………… 35, 36 | そ | 槽…………… 10, 14, 63 |
| | 井戸側…………… 29, 30, 31, 32, 35, 50 | | 草鞋…………… 2 |
| う | ウシ…………… 5 | た | 竪穴建物…………… 5, 18 |
| | 白玉…………… 4 | | 樽…………… 53 |
| | ウマ…………… 5 | ち | チャンスン…………… 59, 60, 63 |
| | 漆桶…………… 54 | | 柱状木製品…………… 45, 46, 47, 49, 57, 59, 60, 61, 62, 63 |
| え | 円形巨木柱列…………… 61 | | 彫刻柱…………… 61, 62 |
| お | 凹基式石籬…………… 18 | | 朝鮮通寶…………… 57 |
| | 鬼瓦…………… 50 | つ | 吊り具…………… 32 |
| か | 花崗岩…………… 36 | と | トーテム・ポール…………… 60, 61 |
| | 滑石製勾玉…………… 4 | | 土鈴…………… 14 |
| | 寛永通寶…………… 53, 54 | な | ナイフ形石器…………… 4 |
| | 簪…………… 50 | | 奈良火鉢…………… 42 |
| | 環状列石…………… 61 | ね | 粘板岩…………… 36 |
| き | 凝灰岩…………… 53 | ほ | 庖丁…………… 52 |
| さ | サヌカイト…………… 4, 12, 18, 63 | ま | 組板…………… 32 |
| し | しがらみ…………… 2 | み | ミニチュア土器…………… 5 |
| | 人面墨画土器…………… 5 | | ミニチュア土鍋…………… 49 |
| す | ストーンサークル…………… 61 | | |
| せ | 青花皿…………… 39, 42, 64 | | |

〈地名・遺跡名など〉

- | | | | |
|---|----------------|---|------------------|
| か | 烏丸崎遺跡…………… 61 | と | 豊中遺跡…………… 61, 63 |
| し | 萩内遺跡…………… 61 | ま | 真臨遺跡…………… 61 |
| | 城山古墳…………… 2 | ゆ | 湯ノ部遺跡…………… 61 |
| ち | チカモリ遺跡…………… 61 | | |

**The Excavation Report
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume XV

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in fiscal 2009

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SD: Ditch

SE: Well

SK: Pit

SP: Posthole

SX: Other features

NR: Natural stream

CONTENTS

Foreword	
Explanatory notes	
Chapter I Archaeological researches in the North-eastern sector of the Nagahara site.....	1
S.1 Location of the site and progress of research.....	1
1) Location of the Nagahara Site.....	1
2) Previous investigation in the surrounding area.....	2
3) Progress of research.....	6
Chapter II Investigation results.....	9
S.1 NG09-1 research.....	9
1) Stratigraphy.....	9
2) Features and artifacts.....	12
3) Artifacts from each stratum.....	14
4) Conclusion.....	18
S.2 NG09-2 research.....	19
1) Stratigraphy.....	19
2) Features and artifacts.....	22
3) Artifacts from each stratum.....	39
4) Conclusion.....	42
S.3 NG09-3 research.....	43
1) Stratigraphy.....	43
2) Features and artifacts.....	47
3) Artifacts from each stratum.....	54
4) Conclusion.....	57
Chapter III Examination of investigation results.....	59
1) Use of a pillar-shaped wooden artifact.....	59
Chapter IV Conclusion.....	63
References.....	69
Index	
English Contents	

報告書抄錄

ふりがな	ながはらいせきとうぶちくはつつちようさうこく15									
書名	長原遺跡東部地区発掘調査報告 XV									
編著者名	田中清美									
編集機関	財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所									
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833									
発行年月日	西暦 2011年3月30日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
		市町村	道路番号							
なかはら 長原遺跡	なかはら 長原市野区 なかはら 長吉六反2丁目	27126	-	34° 36' 15"	135° 34' 25"	1次 100907~110129 2次 100820~110226 3次 100202~110331	300㎡ 300㎡ 150㎡	長吉東部地区土地区画 整理事業		
所収遺跡名	種別	おもな時代		おもな遺構		おもな遺物				
長原遺跡	その他	縄文時代				縄文土器・石畿				
	その他	弥生時代		溝・土壌・小穴		弥生土器				
	田畑・その他	古墳時代		水田・自然流路		土師器・須恵器・木製品				
	その他	飛鳥時代		自然流路		土師器・須恵器・木製品				
	集落	室町~江戸時代		柱穴・井戸・土壌・溝 埋納溝		土師器・瓦質土器・中国産磁器・瓦 国産陶磁器・朝鮮通貨・寛永通貨				
本書は、長原遺跡において2009年度に実施した3件の発掘調査の成果を報告するものである。 後期旧石器時代の可能性のあるサヌカイトの剥片、縄文時代後期に属する土器や石畿が出土した。 弥生時代では前期および中期の溝や小穴を検出し、西方の集落域と当地域の関わりについての資料を得た。 飛鳥時代の流路から出土した本遺跡初出しの削出しのある柱状木製品は、府下でも稀有な事例であり、当時の祭祀や精神生活を究明する上で重要な資料となった。 室町時代の濠の可能性の高い溝および、柱穴、井戸、土壌などは、今後六反地域の中世集落の実態を明らかにするうえで基礎となる資料である。 江戸時代初頭の肥前陶器小皿や中国産青花皿を埋納した土壌は長原遺跡では初出である。										
要 約										

